
知らない天井だ……。

黒裂 那之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない天井だ……。

【Nコード】

N4834W

【作者名】

黒裂 那之

【あらすじ】

「許さない……………！」

俺は忘れない。絶対に！

いつか必ず、俺はこの国に復讐を果たす！」

18歳の誕生日の夜、俺は親友の孝太と共に勇者として異世界へと召還された。

だけど……それは決して偶然じゃなかった。

呼ばれることは必然だった。呼ばれる事は、かつての俺が心から

望んでいたことだった。

……そして俺は、全てを思い出す。

だから、何もかもへの復讐を始めるとしよう。孝太を救い、力を手に入れ……そして、俺が全てを、滅ぼしてやる。

※あらすじ変更しました。

ハジマリの決意（前書き）

追加プロローグです。

かなり短いです。

ハジマリの決意

なんだ……俺は……死ぬのか……？

ただ良い様に使われただけで、なにも出来ず……何の意味もなく死ねって言うのか？

……この病気は、きっと治らない。俺は死ぬ。それは、回避できない運命だ。

だから……運命は、俺に全てを諦めろ、と？

復讐はさせない、とでも……？

……そんな運命は、俺が許さない。

俺は、絶対に許さない。

あいつらを……あの国を、俺は絶対に許すわけにはいかない。

殺す。殺すんだ。

潰す。潰すんだ。

壊す。壊すんだ。

全てを殺す。全てを潰す。全てを壊す。全てを……滅ぼす。

俺は死ぬ。でも、だからどうしたって言うんだ？

死ぬのなら、もう一度繰り返そう。

また死ぬのなら、何度だって繰り返そう。

いつかきつと、この国を潰しつくすために。

復讐を、果たすために……。

だから……そのために、俺は、死ぬことにしよう。

……いずれ来る、復讐の時のために。

……俺は、自分を……復讐の運命へと導こう。

これから全ての人生は、あの国への、復讐の為に……。

……さあ、始めるとしよう。

全ての運命への、復讐を。

勇者召還（前書き）

初投稿です。頑張って書いていきたいのでよろしくお願いします。

あと、プロログなのでこれもかなり短いです。

勇者召還

星が綺麗だ。

輝く夜空を見上げて、少女はそう思った。

「レンカ様、魔法陣の用意が整いました」

と、すぐ目の前からそう聞こえて、レンカと呼ばれた少女は視線を前へと向ける。

そこには、俗にメイドと呼ばれる格好をしている者がいた。この人の名前は、主であるお母様でさえ知らない。

「ありがとうございます、メイドさん」

「レンカ様の命令ですので」

目の前に広がるこの魔法陣を用意した理由は、たったひとつ。勇者と呼ばれるこの国の救世主をここに召還することだ。

「騎士の皆さまは、召還に備えて準備をしてください」

そしてその際には、失敗すればなにが起こるのかまったくわからない。
故に、いつでもなにが起きても良いように準備を施す。

「勇者召還、頑張ってください」

「絶対に成功させて見せます」

「そうですか。期待していますよ、レンカ様」

一度……二度……三度、深呼吸をその場でする。

そして私は覚悟を決めて、魔法陣の近くまで歩いていく。

……絶対に、成功させる。

私は腰にかけてあった短剣を抜き取り、それで左手の親指の表面を切り裂く。そして血が指から溢れ、私は滴るそれを魔法陣へと躊躇なくかけた。

瞬間、空気が変わる。魔法陣の魔力が激しく乱れて溢れだす。

その魔力をなんとか維持しながら、私は詠唱を開始する。

……長い長い時間の中、ついに詠唱は終了し、突如魔法陣の中央に黒い渦が発生した。

「やった……成功しました……！」

そしてその渦から……鈍い光を放ちながら、なぜか二人の少年が姿を現した。

第一話 最悪な誕生日（前書き）

基本不定期更新ですが、できるだけ必ず一カ月以内には投稿していきます

第一話 最悪な誕生日

今日は俺の誕生日だった。

いいことが起こるといいなあ、とか。

彼女がいればなあ、とか。

まあいろいろ思ったわけですよ、はい。

結局、親友（仮）と男だけの寂しい空間で祝ってもらってたんだ
けどね。

……でも、さ。

まさかあんなことになるとは思わないでしょ普通。

異世界召還とか……………。



ケーキに入れた蝋燭の火を消すため、部屋の電気を消して前へに
向き直った。

特に装飾など無いシンプルなショートケーキが蝋燭の火に照らさ
れてよく見える。

「ほら、さっさと火を消せよ」

「へいへい」

蝋燭の数は18。受験を控えているんだけど、こんなこととして

もいいんだろうか。

……まあいいよね。うん。深く考えないようにしよう。

適当に息を吹きかけ、全ての明かりを消し去ってやる。

「おめでとさん」

「男に祝われても大して嬉しくねえ……」

そんな俺の言葉を見殺して、この無駄にイケメンな親友（仮×自称）は部屋の電気を再びつけようと……

……あれ？

「早くつけろよ」

「いや……もうつけてるんだが……」

「なんだよ。停電か？ 今時珍し……」

俺の言葉は、途中で止まる。

……え。だってさ……これ、なに？……。

「？ どうした仁。急に黙っ……」

お。どうやらこいつもそれを見つけたようだ。

それじゃ、いくよ？ セーのっ

「「ブラックホール？」」

そう。なぜか目の前に黒い渦が俺たちを吸い込もうと頑張っているたのである。

もちろんブラックホール（たぶん）なんて引力に逆らえるはずもなく

そのまま仲良くその中に吸い込まれましたとき

「――」

どこだ……ここ。

こういうときは十分に警戒しないと後々後悔するからな、油断はしない。

まったく意味のわからない状況の中、いつも護身用に上着の内側に入れて持ち歩いている『ある物』に手をかけておく。

「助かった……のか？」

親友（名前なんだっけ。忘れた。名乗るまでこのまま呼ぶか）が隣で声を上げるが、完全無視してやる。

……なんだこの状況。

隣には親友（仮）。周りには武器を構えた兵士共。目の前には微妙に豪華な服を着ている美少女。

……うん。もう大体予想できる。だってテンプレじゃん、これはあ……。そうだな、この美少女になに言われるか……。予言してやる。

『勇者様、よくぞ来て下さいました』だ

「勇者様、よくぞ来て下さいました」

ほら、な？

「勇者……？」

バカ発見。

あ？ 今のこの状況は使えるかも。
うん。っていうか利用しよう。

「ところで、勇者様はどち「こいつです。間違いありません。俺が保障します」」

親友（仮）を指差して、言いきってやった。
まあ頑張れや親友（仮）。俺は勇者なんて嫌だからな。傍観でもさせてもらうよ。

「え？ おいどういことだ仁」

「知らね。ほら勇者様、その姫様（テンプレなら間違いない）が君と話したがつてるよ」

「えっと……もう、よろしいんでしょうか？」

ほら、早く続き聞いてやれよ……と親友（仮）の背中を叩いてやる。

不満そうな顔を向けられるが無視。男がやってもキモいだけですから。

さて……俺は状況確認でもするのでしょうか。

「それあの……俺たちはどうしてこんなところに……？」

あ。そういや俺ら、靴履いてねえ。どうしよ。

「私があなたたちを……勇者として召還したからです」

まあそこらへんはどうにでもなるか。

「?？」 どういことだ？」

あー、暇だ。ん、周りの騎士さん達も随分暇そうになく。うむ、仲間だ！

「魔王と呼ばれる魔物の王を倒してもらうべく、私たちが異世界からあなたたちを呼びだしたんです」

まああれだ。姫様でも観察するでしょう。
……すげ。見たことねえ、こんな人間。

藍色の瞳と藍色の長髪。服は白とか赤とかで形成された、これまた見たことのない服。

なんというか……こういうのが美少女って言うんだなと実感させられる。

「……魔王、勇者、異世界、召還……ね。到底信じられる話じゃないさそうなんだけど……その様子を見るに、本当なんだろうなあ……」
「……お願いします、勇者様。この国を、救ってくださいませんか？」
「……はあ。仁、どうする？」

「んあ？ なにが」

急に振るな。もっとかみ砕いて説明しろや。

「勇者になって、国を救うか……」

あーはいはい。そこまでテンプレ進んだわけね。

「勇者という名の使いっパシリの奴隷になった方がいいかってことね」

騎士の野郎どもから殺気っぽいものが送られてきたけど気にしない

「いいんじゃないね？ 家族や友達、故郷と自分を離れ離れにさせた張本人の言いなりになりたければ……な」

「え……」

「だって、そうだろう？ あんたらは勝手に俺達を孤独にさせた張本人どもだ」

平気を装ってるけど、俺だって怒ってるんだよ。

「姫様、あんたそこらへんわかってたかい？ この『召還』って行為は、人の恨みを買うようにできちまつてるシステムだって」

「あ……」

「想像してみなよ。そう、例えば……ここは決して逃げられないサーカス場だ。自分はただ、役目をこなす『商品』でしかない。そんなところに連れてきた張本人どもを恨まないと思うか？ そんなこととはあるわけない。俺なら恨む。俺なら足掻く。俺はピエロなんかじゃなく、人間だから」

感情があるんだよ、俺たちには。

俺たちはあんたらの道具じゃない。俺たちは意思を持つ生き物だ。勝手に召還しておいて、国を救えだ？ ふざけるな。そんなことするくらいならあんたらの国を潰してやるぞ、俺は。

「ま、元の世界に戻してくれるんならどうでもいいんだけどな」

……やべ。これフラグじゃん。

「す、すみません……そ、送還は、あと1年魔力を貯めないとでき

ないんです……」

……フラグの力、しかと見届けさせてもらいました

「……俺はやる」

「ん？」

「俺は、この国を救ってやる」

え。マジすか。

「困ってる人がいたら助けるのは、当然だろ？」

「あー、はいはい。そういうやつでしたねお前は。……そういうやつだったか？」

まあいいや。めんどくさい。

「あ、ありがとうございます、勇者様！」

「ああ」

「んじゃ、俺はこいつの従者……ってことなのかね」

「サポート頼んだぞ、仁」

「へいへい」

……さて、と。

これがテンプレそのままなら……

……召還陣じゃ、たぶん送還できないんじゃないかね？

……ま、まあ決めつけはよくないよね、うん。

でも……明日にでも、ここに調べに来るか……。うん、そうしよう。

第二話 屋上での会話（前書き）

今回短いです。

第二話 屋上での会話

「……すげーなあ。月が4個もあるぞ」

俺たちが召還された場所は、どうやら城の屋上だったらしい。

とりあえず今日は休んでください、とのこと、姫様（本当にそうだったらしい）と騎士っぽい人たちは城の中に行ってしまった。

いまこの屋上に残っているのは、俺と親友（仮）と案内役のメイドだけだ。

空を見上げれば、4つの月っぽいなにかが彼方に見ることができ。なぜ月っぽいなにかなんて表現をするかというと、俺たちの世界と色とかいろいろ違うからである。

ひとつは赤。ひとつは緑。ひとつは青。ひとつは黄土色だ。

その4つがまるで正四角形のように規則よく空に浮かんでいる。しかも全ての月に、模様がない。

「あれは、四大の神々がこの世界をあそこから覗いていつと言われている、別名『神の瞳』というものです。まあ、一般的には月としか言われてませんが」

メイドさんが補足してくれる。

神の瞳……ねえ。じゃあ太陽はどうなってるんだろ。気になるな。

「ところで……仁」

「あん？」

ずっと口を閉ざしていた孝太（さつき名前思い出した）が唐突に声をかけてきて、そちらを見る。

……なんか眉間にしわを寄せて難しい顔をしていた。

「本当に俺についてきてくれるのか……？ お前、この国に味方するのは嫌だとか言ってたじゃないか」

「あー、うん。ま、流れ的にな。お前は一人で無理しすぎるし考えなしだし……なによりお前、あの状況で嫌だと言えるところかよ。殺されるかもしれんだろ」

「いや、さすがにそれは……」

「そうかな？ お前は勇者だが、俺はただの人間ってことになってる。そんなやつが王族にタメ口聞いて、しかも依頼を拒否しただなんてことになれば、どうなるかわかったもんじゃない。そうだろ？」

「だが俺の親友だと言い張れば……」

「バカだな。そんなの一時しのぎにしかならねーよ。どうせその場合、事故に見せかけて殺される」

「っ……」

「……ま、別にこの選択をそんなに後悔してるわけでもないし、別に気にしなくてもいいって」

幸い、俺の家族は全員2年前に死んでるしな。

元の世界に、俺がいなくなったことで悲しんでくれるやつらなんて数えるほどしかない。

……問題は、本当に元の世界に還れるか、だ。

もし姫様が嘘をついているとして……もしくは本当のことを知らないとして

俺たちが絶対に元の世界に戻れないとすれば……俺は、この異世界から勇者を召還をしようとか言い出したやつだけは殺すかもしれ

ないけどな。

ま、それは置いといて……

「それより孝太、この国サイドのメイドさんがここにいるのに、そういう話はあまり持ち込まないでくれよ」

「あ……」

「考えなしも悪くはないが、少しは頭を使えバカが」

見れば、メイドさんがにこやかにこちらを見ていた。

孝太もそれに気づいたようで、慌て始めた。今頃遅いつてのに。

「それよりメイドさん。お願いがあるんだけど……」

「はい、なんでしょうか」

「……靴を2人分、用意してください」

そう。忘れていたけど今俺たち、裸足である。

いい加減寒いんです、はい。

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

そう言うと、メイドさんが屋上の扉を開けて出て行った。

ふう……これで少しは落ち着け……

「お待ちどうさまです。少々遅れてしまいました」

……いや待て。

え……なにこれ瞬間移動？

気づけば目の前に、もうあのメイドさんが立っていたのである。
……両手に2人分の革製の靴を持って。

「いやいや……ええ？ いまなにしたんだ……？」

「はい、ちよつとそこで靴を作って来ました」

「どうやって？」

「魔法です」

「魔法……ねえ。どんなの？」

「プライベートですので、明かすことはできません」

なるほどね。だから一度屋上から出たわけだ。

「今の瞬間移動は？」

「メイドをなめないでください。人に気づかれずに近づくことくらい、簡単にできます」

「そりゃ凄い」

全ての謎が解けたので、ちよつと満足。

俺と孝太はありがたく靴を受け取り、履かせてもらった。

うーん……異世界の靴だからか？ 慣れない。

「魔法……ね。俺にも使えるのかね」

「基本的に、勇者とされる方に魔法を使えることはありません。ですが仁様は勇者では無いようなので……わかりません」

「へえ。できるもんなら使ってみたいもんだ」

「勇者は魔法を使えない……？ ならどうやって魔王に対抗するんだ？」

「勇者には、魔法は使えませんが聖剣を操る力があります。その他には、身体能力がかなり跳ね上がったたり、傷の回復速度がありえな

いほど高くなったりしますね」

なにそれどんなチート？

……俺はそんなの感じないな。ってことはやっぱ孝太が勇者で確定か。

……でもさ。そろそろ……

「話はまた後日ということで、そろそろもう休みたいんですが」

うん。もう寝たい。あと寒い。

「かしこまりました。ではお二人とも、客室にご案内いたしますのではぐれずについてきてください」

「へーい」

「はい」

さて……明日はやるべきことがいっぱいだ……。

第三話 王様への面会で

メイドさんについていきただり着いた先は、城二階の客室。

……どうやら俺と孝太はそれぞれ違う部屋をあてがわれることになったらしい。元々二人来るなんて思ってなかっただろうから、準備は早い方なんだろう。

「では、最後にお二人へ明日の予定を説明させていただきます。少々長くなってしまいかもしれませんが、よろしいでしょうか？」

「あいよ」

「大丈夫です」

前者の返事が俺、後者は孝太だ。まあわかりきってるとは思うけど。

それにしても、明日の予定か……明日は召還陣を調べる術すべをなんとかして見つけて調べようかと思ってたんだが……。

本で調べようにも、俺はこの世界の文字がわからないので魔法かなんかで自力で調べてみるしかない（孝太は読めるらしい。この羨ましき勇者補正め！）。

他人に聞くななんてのは更に論外。もしかすれば、この国は俺たちを利用することしか考えてないかもしれない。魔法のことなんて俺にわかるわけないのだから、嘘をつくのは簡単だ。

……悪いが、俺はこの国を最大限の疑いをかけながら調べさせてもらう。

まあ、明日の予定に暇がなければ召還陣を調べるのはまた後日に

なってしまうんだろうが。

「まずお二人には朝8時、このアルスレイト王国の国王様に面会をしていただきます。その後、勇者様は聖剣をお受け取りになり、アルスレイト王国最強の騎士と比喻されるリスカル様から剣術をお教えいただく予定となっております。剣術を習い終わった後は、のんびりしていただいていただいて結構です。明後日からの予定はまた明日に、説明させていただきます」

「わかりました」

「え、いやちょっと待て。俺は？」

今の説明じゃ、俺前半しか出てきてないんだが……。

「仁様は面会後は自由時間となっております。こちらと同じく、明後日からの予定は明日に説明させていただきます」

あー……つまり、お前勇者じゃないんだから勝手に自分で強くなれってことね、わかります。

「お分かりいただけたでしょうか？ ではお二人はすでに疲れが溜まっているようなので、お休みしていただくことをお勧めいたします」

「んじやお言葉に甘えて」

「ありがとうございます」

……つと

「あ、ちょっと待ってメイドさん」

少し気になることを聞いてみようかと思い、去りかけていたメイ

ドさんを引き止める。

「なんでしょうか」

「……過去の勇者は何人いて、どんな終わりを告げた……？」

「これまでの勇者様の人数ですか。現代の勇者様である孝太様を除きますと、9人となります。そのうちの3人の勇者様が魔王との激闘の末お亡くなりになられ、うち1人が行方不明。残りの5人の勇者様はこのアルスレイト王国の歴代王妃様とご結婚をし、老衰にてお亡くなりになりました」

……なるほど。

元の世界に還ったやつはいない……か。

……行方不明っていうのは怪しいけど、還ったとしてもこの国が還したわけじゃない。

この国……ちよつと胡散臭いな。

「わかったよ、ありがとう。俺は精々孝太が死なないようにサポ―トをするさ」

「頑張って下さいね。応援していますよ」

「どーも」

さて……今日はもう休むとしますか。

次の日。午前8時丁度。謁見の間（たぶん。本当は知らん）。

「今代の勇者、コウタ・ヒサギ。そしてその従者、ジン・アカサキ。中に入れ」

そう声が聞こえて、目の前の大きな赤い扉が開かれた。

……現在、当初の予定通り俺たちはこの国の王と面会することになった。

孝太は与えられた礼装を完璧丁寧文句無し百点で着こなし、悠々と扉の向こうへと歩いて行く。

……ん、俺？ いや……俺は礼装なんてめんどくさいもの着たくないから、持ってきていた高校の制服。そしてただ孝太についていくだけです。がなにか

……うわあ。なにこれ殺気？ 凄いな。………っていうか殺気が全部俺の方に来てる気がするの？ 気のせいかな？ うん気のせい。きつと気のせい。気のせいに違いない。

他にも好意みたいな視線もあるが、それら全部孝太に行っちゃってる。くそ。このイケメンめ。いつか殺す！

実はこの時、二人を召還した王女であるレンカだけは仁に好意の視線を送っていたのだが、今の仁にそれを感じ取る余力はなかった。

……孝太が片膝をついたので、俺も習って孝太の左斜め後ろで片膝をつく。

「おぬしが今代の勇者コウタ・ヒサギで間違いないか？」

そう声の主であるこの国の王は……はつきり言って良い印象を抱けない。

大きな赤いマント、宝石の宝飾が所々に見られる豪華な服、王冠。

……そして、人を利用することしか考えられないとも言うような、目。自分のためになら周りは死んで当然とでも言うべき目。

……俺には、わかる。こいつは間違いなく、俺たちの人生を奪うとわかっていてこの世界に呼びだした。自分のためなら人生くらい差し出すのは当然……と。

嫌いだ。危険だ。こいつは、殺さないといけない。

そんな考えが頭を過ぎるが、今はなんとか自重した。

……今の俺には、逆らえるだけの力はない。

上着の内側に隠してある『あれ』を使えばすぐに殺すことも可能だが……どうせそのあと、騎士に俺が殺される。

それはマズイ。それは嫌だ。

結果が全て主義である俺にしては、その結末は望むべきものではない。

……殺るなら、証拠は残してはいけない。

正々堂々正面から立ち向かう。なんてのは、バカだけがやることだ。

この世は結果が全て。

この世は勝者こそが正義。

生き残るためには、たとえ逃亡であろうと迷いなく実行する。

それが俺のポリシーだ。故に、まだ殺してはいけない。まだ早すぎる。

人を殺したことがある俺が言うのだから間違いない。

……孝太が王と話をしている間、俺はこの醜い王をどうやって殺してやるかについて、ずっと考え続けていた。

人の人生を奪うことがどれほどの罪か……こいつには教えなければいけない。

まず、俺が殺すことに決定した一人目は……このクス王だ。

第三話 王様への面会で（後書き）

ちよつとオーバー過ぎた気もしますが……実際仁くんは結構怒ってるんですよ

誰を許して誰を殺すか。決めかねているんです

できれば感想をいただけると嬉しいです

第四話 孤独の『第二王女』

……さて、こうして殺す相手その1が決まったわけだが……どうしたものか。

とりあえずこの件は保留にしとくか。

そしてただいま、俺は孝太と別れて城の裏庭っぽいところに一人でいるわけだが……これからどうしようかね。

とりあえず召還陣の解析をする方法を見つけたんだけど……そういう魔法ってないのかな。

魔法を本で覚えるにしても俺は字が読めないからダメだし、誰かに習うにしても魔法騎士みたいなやつらは忙しくて教えてくれないだろうし……

困ったな……。

「あれ……？ ジン様ですか……？」

「ん……？」

どこかで聞いたような声だなと思い、辺りを見渡す

すると、いつからいたのか俺の右隣4m先ほどに、俺と孝太を召還した張本人であるこの国の姫様が立ってこちらを伺っていた。

「どうした姫様。孝太のどこにでも行かなくていいのか？」

あいつが勇者なんだから、俺より孝太の方に様子を見に行った方がいいんじゃないだろうか。

「いえ、邪魔になるといけませんし……それからジン様、私は

姫ではなく第二王女です。間違えないでください」

「なんか大した違いあるのか……？ ……………まあいいや」

第二王女、ね。合計何人王女いるんだ？

っと、そうだ！

「ところで王女様、いまヒマ？」

「一応いまやることはありませんが……」

「じゃあさ、俺に魔法教えてくれない……？」

そうだ。よく考えればこの第二王女様は俺たちを召還したわけだから、魔法が使えるはずなんだ！

「魔法、ですか」

「ああ。俺は勇者じゃないから、（恐らく）使えるはずなんだよ」

「そうですか……それなら、私の出す条件を一つ飲んでくれるのなら……教えてあげます」

条件……？ この王女のことだから、あんまり重要なことではないと思うが……

……俺の目的の妨げになるものなら、聞くわけにはいかない。

「それで、その条件っていうのはなんだ」

「……えっと、その、あの……わ、私を……名前で呼んでくれませんか……？」

……は？

「そんだけ？」

「は、はい」

「……………それくらいならお安いご用なんだけど」

なんか拍子抜けだな…………いや、まあ、これでよかったんだけどね…………。

「ホントですかっ!？」

「ああ……………それで、君の名前は？」

よく考えれば俺、この娘の名前知らん…………

「あ、そういえば自己紹介がまだでしたよね。…………私はこのアルスレイト王国の第二王女、レンカ・アルスレイトです。以後お見知り置きを」

「ん。俺は勇者久木孝太に巻き込まれて偶然召還された不運な高校生、赤崎仁だ。よろしくな、レンカ様」

「様もやめてください……………って、ええ!？ ジン様、勇者様に巻き込まれただけだったんですか!？」

「そうだよ。全部あいつのせいだよ…………あと、様を外してほしいなら、俺を呼ぶときも外してくれ」

「え、いいんですか？」

「つーか、レンカ様は第二王女なんだろう？ 俺が外していいか聞きたいぐらいだ」

普通、タメ口で聞くなんてこと王族にしちゃいけないはずなんだけどな…………。

「えっと、じゃあ……………ジン」

「ん。レンカ」

「えへへ……………ジン!」

「レンカ」

「ジン!!」

「レンって、おわっ!？」

何度続けるんだろうと思いつつまた名前を呼ぼうとした瞬間、レンカが飛びついてきて俺は後ろに向かって仰向けに倒れた。

地味に痛い。

「ど、どうした？」

「えへへ……………あ」

ずっと俺にくっついて笑顔でいたが突如なにかに気づいたように、瞬時に俺から離れて立ち上がった。

その顔は、リンゴのように真っ赤。

……ヤバいな、かなり可愛いぞ。

「あの、その、え、えっと……すみませんでした!」

「あ、ああ、別にいいけど……いきなりどしたの? なんだか様子がおかしかったけど……」

「その……嬉しくて」

「嬉しい?」

「……私と、対等に接してくれて……」

あー……なるほど。

第二王女、か……。たぶん、その肩書きのせいで、対等に接してくれる奴なんて誰もいなかったんだろう。

兄妹達とは、王家の継承者を巡る覇権争い。

父親は、王の責務。母親も同じく。

メイドも対等に接してなどくれるはずもなく、城下街に友達を作りに行くことさえもできない。

他の貴族達にだって、嫉妬のような感情しか向けられてこなかったんだろう。

故に、常に孤独……。

……対等。

『特別』なやつらにとって、それは手に入れることが非常に難しいものだ。

特別であればあるほど、難しい……。

そして『第二王女』であるレンカにとって、それは最大の難関。

……俺が、一人目？ 十数年間の中で、俺が……？

なんて寂しい人生なんだろう、それは。

なんて楽しくない人生なんだろう、それは。

……こいつは、殺せないな。

レンカは殺さない、絶対に。

むしろ……助けたい、ってか。

……俺はレンカに近づき、その頭に手を置いて、静かに優しく撫でる。

「……寂しかった、よな」

「……はい」

「一人は、嫌だったよな……?」

「はい……」

「ずっと、『普通』を望んでたんだよな……?」

「……私は『第二王女』なんて大層な人物には、なりたくありませんでした……」

「……辛かったか?」

「凄く……辛かったです」

「『普通』以外、なにも望んじやいなかったんだよな……?」

「はい……他にはなにも、いりませんでした。ただ、私は普通に生きたかった……。でも、私は……」

「だったら俺の前でだけでも『普通』になればいい。俺の前では、ただの『レンカ』、ただの少女としていてくれればいい」

『普通』がどれだけ幸せなことか。

『普通』がどれだけ恵まれていることか。

『普通』が………

「……本当に、いいんですか?」

「ああ」

「ほん、とう………に……?」

「もちろんだ、レンカ」

「……う……ふぁう……あり、がとう………ごさいます、ジン………ぐす」

あーあ……泣かせちゃったな……

……ま、今くらいは……好きなだけ泣かせてやるか……。

……そう思った俺はただ無言に、レンカが泣き止むまでずっとた

だ頭を撫で続けていた。

第五話 幻惑と干渉と魔法（前書き）

今回いつもより若干長い……かも。

第五話 幻惑と干渉と魔法

さて、思い返してみればかなり恥ずかしい会話から一刻。

俺はやつとのことレンカに魔法を教えてもらえることになった。

ちなみにまだ時間は午前十時ほど。時間はたっぷり余っている。

「ではまず、魔力を扱えるかどうか確かめさせてください。前提としてそれが出来ないと魔法は扱えませんので」

レンカの目はまだ赤いままで他の人達に見られると色々と不味いのだが、どうせしばらく暇なので誰に見られることもないと本人は言ってるんだからきつと平気だろう。

「どうやって確かめるんだ？ 俺の居た世界に魔法なんてものは存在しなかったぞ」

「魔力は他人からの『干渉』を受けることで具体的に感じる事が出来るようになります。魔力を扱える人がいなければそもそも魔法なんて広まりようもないので問題はないと思いますよ」

まあ、そうだな。

「ならどうやってその『干渉』を受けるんだ？」
「簡単です」

と、そう言ってレンカはいきなり俺の右手を両手で握ってきた。

普段なら『冷静』で有名な俺がこの程度で動揺するはずもないのだが、レンカが顔を真っ赤にしていたのだから少々恥ずかしくなっ

てしまったことはしかたのないことなんだろう。

「い、いきますよ……?」

「あ、ああ……」

何をするんだと聞きたいところだったのだが、生憎そんなに沢山の精神の余裕はなかった。

と、直後。

「っ……!?!」

何かが……俺の体の中に、俺のものではない『なにか』が入ってきたことを、確かに感じた。

それは右手を通り、右肩、肺、心臓……と、そこまで巡ったところで変化が起こった。

俺の心臓部に、入ってきた『なにか』と同種類の『なにか』を感じたのだ。

……しばらく経つとレンカから送られてきた『なにか』が体から弾き出され、空気に還元して消え去ったことを感じる。否、理解する。

「こいつは……」

「感じましたか?」

「ああ……これは何というか……凄いな」

言葉では表しにくいんだが……いままで何も感じることの無かった心臓に、『なにか』が居座っているような感覚がある。

おそらくこれが、『魔力』というものなんだろう。

「……ふむ」

少し、試してみよう。

思い立ったが吉日。今度は未だ手を握っているレンカの方へと、体の中に居座る『魔力』を『干渉』させてみる。

「ふぁ……！？」

意外に簡単に出来たな……。

まるで手を動かすかのように、簡単に繊細に扱うことが出来た。

……まあ、ずっと体の中に居座っていて、ただ気づかなかっただけの臓器……自分の体の一部のようなものだから、すぐに扱えるようになっていても不思議はないだろう……たぶん。

「わ……はふう……」

「っと、マズっ！」

考え込んでる間ずっと魔力をレンカの方に垂れ流しにしていたしまった。すぐさま干渉を止め、レンカの顔色を確認する。

………見なかったことにしたい。

レンカは顔を赤くして、何だかどこか虚ろな目で遠くを見つめていた。何の麻薬だこれは。

けど……なんか……かわいい、ゲフンゲフンッ！ ……はい落ち着

いてー。深呼吸。スーハー、スーハー……。

……結果としてレンカから漂う甘い匂いを思い切り吸ってしまった。墓穴掘ってんじゃないよ、俺。

いいから、落ち着け……落ち着け……落ち着け……よし。

「大丈夫か、レンカ」

「え、あう、ふ、ふあい、だいじょうぶ、です」

うん、大丈夫じゃないな。

「……気持ちよかったです」

「はあ、そうですか」

敬語になってしまった。はっきり言って、あれはあまり気持ちの良いものではないと思うんだが……

食事が喉を通る感覚に近い。何とも言えないというか……うん。

「それにしても、ジン様は凄いですねー……」

……語尾延ばしてる。まだ若干目が虚ろだ。

なんだ、この症状……酔いみたんなものかな。

……魔力酔い？ 召還魔法なんて大層なものが扱えるレンカが？
有り得ない。どんなチートだそれは。

第一、俺は微量の魔力量しかレンカに干渉させてないはず……。

「『幻惑の魔力』なんて、初めて感じましたよー……」

「幻惑の、魔力？」

ナニソレ。

「幻惑の魔力はー……干渉に使われるとー、凄く気持ちよく……はふう」

あー、このままじゃ埒があかない。どうしたものか……。

「……待つか」

閑話休題

「ごめん、いきなり干渉して……」

「い、いえ、大丈夫です……気持ちよかったですし」

とりあえずレンカが落ち着くまで待っていることにし、結構な時間経ってしまった。

その間に聞いたことなのだが、どうやら俺の持つ『幻惑の魔力』とか言うものは少々特別らしい。

特に幻術に特化した魔力で、もしかすれば『究極幻術』アクチユオシダーフェレンスとか言う、未だ仮説でしか無い抗論上の魔法が使えるかもしれないとか使えないとか。

で、問題なのはこの次。

この『幻惑の魔力』はそれ自体が強力な幻術効果を持っているら

しく、干渉等に使ってしまおうと……曰く、副作用のない麻薬のようなものらしいので、酔ったようになってしまおうらしい。

……扱い方、気を付けないとな。

「で、では次のステップに移りましょう！」

「そ、そうだな」

恥ずかしいことはすぐ忘れよう！　というわけでさっさと進む。

あ、ちなみに『幻惑の魔力』だったからと言って別に幻術しか使えないわけじゃない。まあ、あれらの特性のせいで幻術以外を使っても色々と普通とは多少違うことになってしまいうらしいのだが、細かいことは気にしない。

幻術が一番上手く扱える。それさえわかれば十分だ。

「では次に、魔法の仕組みについて説明を「あー、それはいらん」どうしてですか？」

どうして、ね……。

「敢えて言うなら、『固定概念』を持ちたくないんだよ」

「固定概念？　ですか」

「そう。魔法を使うにはあれが必要とか、こうしないと発動しないとか……そういう固定概念を植え付けたくないんだよ」

ずっと考えていてわからなかった問題も、落ち着いて違う視点から見てみれば簡単に解けることもある。

それと同じようなものだ。

魔法には必ずあれが必要だとか、そういう固定概念はあまり持たない方がきつと応用が効く。デメリットは大きいが、俺は勇者じゃないからそこまで気負わなくても……扱い切れなくても、ほとんど問題はない。

「だから、簡単な基本を教えてくれるだけでいい。頼める？」
「はい！」



魔法とは魔力の扱い方を応用、複雑化することで、魔力を元に『現象』を作り出す秘術の一つである。

詠唱型、魔法陣型、詠唱、魔法陣の両種混合型、そして無詠唱型等……魔法はいくつにも分類され、主な属性は火、風、水、土、光、闇の六属性に分かれている。

他にもジンがこれから使うことになりそうな幻術や、物質変換などを可能にする錬金術、雷や氷属性などと言った例外がいくつもあるのだが、今は置いておく。

そして、魔法に一番重要と言われるものというものは『思考』そのものである。

把握。否。やるべきこと、起こすべきことを自分自身で『理解』し、詠唱や魔法陣と言った補助を扱い『現象』を現実へと引き起こす。それが基本的な魔法の仕組みである（本当はもっと細かいのだが、ジンの提案によりかなり簡略化）。

よりよく『理解』が出来ていれば、無詠唱も可能である。しかし、余程上手くやらない限りは、燃費がかなり悪くなる。



「と言ったところですね」

「……『理解』、ねえ……」

科学は、何事にも全てにおいて『理解』から始まる。
ひとつの事柄を理解し、そこからさらに広く解明し、再び理解
する。

そう考えるとするなら、『理解』なんてものは現代人の俺たちにとっ
ては打ってつけなんじゃないだろうか。

……まあ、孝太は魔法が使えないみたいだが……。

「では、ジン、まずはどんな魔法が使いたいと思いますか？」

どんな魔法、ね。

そんなものは一つしかないな。元々そのために覚えようとしてい
るんだし……な。

「俺がまず覚えたいのは……魔法陣の、分析魔法だ」

第五話 幻惑と干渉と魔法（後書き）

これからをもっと一話を長くしたいと思います。

第六話 解析の魔術

「……ナニコレ……どこの複写眼だよ……」

レンカが魔法を使おうとしたところを目で追った瞬間、一瞬のうちにくつもの情報が頭に流れ込んできて、全てを無理矢理『理解』する……。

頭が痛い……。

「凄い！ 凄いですよ！ ジン！」

あ、ちよ、ま……まだ頭痛いんだから次の魔法使うなああああ
あああ！！

「頭があ……死ぬう……！」

いやホント冗談抜きで。

……なぜこんなことになってしまっているのか。それはかれこれ
数十分前……。



「分析魔法、ですか」

「ああ。幻術はまた今度にして、今はそれを覚えたいね。出来るか

？」

「はい、大丈夫です」

俺の注文にレンカはそう答え、地面に木の枝でなにかの絵……いや、魔法陣を書き始めた。

しばらく経つと書き終え、こちらに向き直る。

「まずは初歩ですね。干渉と同じように、魔力を流し通してみてください。流したままでは魔法が発動してしまうので、そこに気を付けてやってくれれば大丈夫だと思います」

「ふむ……こうか？」

魔力を通す、ね。発動させないように……。

魔力を通し、その仕組みを『理解』。それが初歩ってことかな。

魔力を流し、魔法陣に張り巡らせていく……。

複雑な回路、そこから連なり発生する効果、最後になにを生みだし何が起ころのか……『把握』『解明』『理解』。

「効果は……癒しの領域？ いや……ああ、そうか。魔力を流した分だけ自動的に回復魔法が発動する仕組みか。あってる？ レンカ」

「……………」

「……レンカ？」

なんだろ、急に黙って……。

「す……」

「す？」

「凄いですよ！ ジン！」

え、いやナニガ？

「実は魔法陣を発動させないように魔力を流すことが初歩なんです！初めてならそれだけでもかなり難しいはずなのに、ジンは、いきなり分析まで出来てるんですよ！凄い、本当に凄いですよジン！」

レンカが俺の手を取って、キラキラした目で手をブンブンと振り回す。

「はあ……そーなの？普通に理解できたけど……」

敢えて言うのなら、教科書を読む感覚に近かった。

新品の教科書を、新品な状態を保ちながらも読み進める、って感じだな。

なんでこんなよくわからん魔法陣が俺にいきなり理解できたかはわかんないけど、そこは深く考えてはいけない気がする。

「次やりましょう！ジン！」

「あ、あいよ……」

そうして全ての課題をクリアしていき、こんな効率の悪いやり方はめんどくさいと俺は思い始めた。

というわけで目に『幻惑の魔力』を集め、空気中に漂う薄い魔力と、魔力同士で合成。空気中の魔力を支配下に置き、目で見ただけで効果が全て把握できる魔法を生み出してみた。

しかし優秀過ぎて、情報がかなり入り込んできて、頭がめっちゃ痛く……あああああああ！？

そ、そして、冒頭に戻る……。



「レ、レンカ……もうやめよう。もう十分だ。というかやめてくださいお願いします頭が破裂しそうなくらい痛いんです……」

「むう……しかたありませんね……」

た、助かった……。

ホント頭が痛い……孝太に後で頭痛薬を貰おう……。

「もうお昼ですね……」

「そ、そうだな……いてえ……」

目に集めた魔力を元に戻し、頭を抑え続ける。

……そうだな。頭の中に火が点いてるくらい痛いと思う。……言葉で言い表せないな。

「こ……孝太の、ところ……ろに、行こ……う。昼飯に……誘、おう……」

「むう……二人ではダメですか？」

「駄目。無理。限界」

あいつから早く頭痛薬貰わなければ、俺は死んでしまうぞ……。

「そうですか……残念です」

「ナゼニ……」

……いや、まあ……さすがに気づいてはいるんだけど……。レンカみたいなのは、勇者に惚れるのがテンプレだろうよ……。

……俺はどこでフラグを立てたんだ。今日会った時は最初から好印象を受けていた気がするんだが。

召還された時は、俺、レンカのこと責めてたはずんだけど……。うーん。

「なあレンカ……俺のどこがいいのさ」

「ふあい!？」

「あー……いや、やっぱりなんでもない」

やっぱりいきなりこんなこと聞くのは失礼だよな……。

「早く孝太んとこ行こう……レンカ場所わかる？」

「……」

「レンカ？」

「え、あ、はい！ 確か勇者様はリスカルさんに剣術を習っているはずです！ おそらく修練場にいると思います！」

「う……うん。なんかテンション高いな……」

やっぱりあんなこと聞くのはマズかったか……なんか変なスイッチ入っちゃってるよ……。

「行きましょう！」

「あ、ちょ……」

レンカはそう言い叫び、俺の手を握ってどこかへ早足で歩き始めた。

「く……これで！」

「駄目だな、まだまだ一発一発の隙が大きすぎだ！」
「ぐあっ!？」

場所は騎士の修練場。城の左側面に位置する場所にそれはある。修練場は広場のように広く、無駄なものがなに一つとしてない。地面は土がそのままにしてあり、空からは熱く暑い太陽が常に照らし続けている。

騎士達は鎧をつけている者達が大半で、毎日倒れる人が一人はいるという事実は当たり前だと言えるだろう。

道場のような場所でもやることもあるのだが、あちらは他の部隊が利用することが多いので騎士達は毎日この暑い中、鎧を着て頑張っているらしい。

同情するぜ……ホントに。

孝太は……うん。なんか一際強そうな人と聖剣で斬り合っている。
え？ 刃引き？ してないしてない。どう見ても殺し合いだね、
うん。

まあ、この世界には回復魔法があるし、あいつには超再生能力もあるし、心配はいらないだろうなあ……。

「よし。頑張ってるかい勇者（笑）様」
「こんにちわです。リスカルさん、勇者様」

レンカと恒例の挨拶をしてやると、二人は斬り合うのをやめてこちらに向き直った。

リスカル……確か、騎士団長だっけ。この人は、金髪に黄緑色の目、整った顔を持つイケメン。リア充爆発しろと言いたい。

……でも孝太の方がイケメン度が高いな。あーホント……二人共、このまま死んでくれ。

「仁か」

「王女自らここに来られましたか……あとそっちのは、確かジン殿と言ったか」

「ういーっす。お前らホント暑そうだなー。こっち見んな、シッシッ！」

「おま……そっちから着いてそれはないだろ……」

「冗談だよ……2割くらいは」

「ほとんど本気か！」

「っ！？」

「てめ！いきなり剣振り回すな！危ねえだろうが！」

ぐ……激しく動いてまた頭が……。

「冗談だ。1割程な」

「コイツ……頭が痛くなかったら即殺してやるところだぞ」

「自称『冷静』くん、慌てすぎだよ」

「黙れ勇者（笑）」

あー……ホント頭痛い……なんか喧嘩する気が失せてくる。

「調子が悪そうだな、ジン殿」

「うん……ただの魔法の使いすぎだよ……」

「凄いんですよジンは！ 幻惑の、ムググッ……！」

俺はレンカの言葉に即座に反応。速攻でその口を手で塞ぎ、相手の反応を伺う。

……とりあえず、バレてはいないみたいだな……困惑してるみたいだが。

……このリスカルとか言うやつは、敵に回る可能性が高いからな。あまりこちらの情報を与えるのは控えた方がいい。

……絶対に忘れない。たとえこちらの生活がどれだけ楽しく変化してしまっただとしても、俺は忘れるわけにはいかない。

こいつらは俺達を拉致した張本人共なんだ。ただ俺達を利用するためだけに呼び出した、怨みの対象……。

……俺はレンカの口から手を外し、とりあえず言い訳を探す。

「あー……あれだよ、うん。普通の人より魔法の修得がかなり早いつて言いたかったんだよ、レンカは」

「へえ。凄いじゃないか、ジン」

「レンカ様がそう言うのであれば、相当なんであろうな」

「どーも」

なんとかごまかせた、か。

……ところで、なんでレンカは黙ってるんだ？
ちらっ、と確認してみた。

「ジンの手の匂いがしました……」

……見なかったことにしよう。
……聞かなかったことにしよう。

決して、顔を赤くして目が虚ろで危ない発言をしていたレンカなんて見ていない。絶対に。

「それより、もう昼だぞ。飯食おうぜ」

あと頭痛薬くれ。

「もうそんな時間か……わかった、行こう。リスカルさんはどうします？」

「俺は他の騎士共と一緒に食うから、気にしなくていい」

よかった。イケメンが二人も一緒にいたなら、きっと食事が不味くなる。

「そんなじゃ行こうぜ、孝太、レンカ」

「そうだな」

「あ、はい！」

とりあえず、こうして俺達は食堂へ三人で向かったとき。

第七話 勇者と復讐の記憶（前書き）

はい、今回最後の方でジン君が結構キャラ崩壊します。

……ちよつとこの設定はやりすぎたかな……。

大幅？修正しました。この話、結構めちゃくちゃなので、少しずつまた修正するかもです。

第七話 勇者と復讐の記憶

頭痛薬を飲み昼飯を食べ終え、俺は次に一人で魔法修煉場へと向かった。

敵戦力は把握しておく必要があるということで行ったわけだが……まあ、凄かったな。

詠唱というあからさまな隙がなければ、かなり強いと思われる。まだ分析魔法程度しか使えないただの人間の俺にしては、正面から戦って勝てるとは思えない。

まあ俺、勇者じゃないから、どんな外道な方法とってもいいよね？ 砂で目潰し×詠唱の邪魔とか。武器を投げるとか。

その後は特に目的もなく城の内部をブラブラし、夕食も孝太と食べ終えた。

そうしてただいま現在。俺達はメイドさんに明日からの予定を、孝太の部屋で聞かされていた……。

「と、いうわけだ」

「いきなりどうしたんだよ、ジン」

「いや、画面の向こう側の奴らに説明してやってただけだ」

「この世界って病院ありましたっけ、メイドさん」

「黙れ孝太。メイドさん、話の続きお願いしまーす」

明日からどうなるのかで、これからの予定が変わるな……。それに予定が決まれば、王を殺すのはいつにするかも正確に決め

られる。

「それでは、明日からのご予定を説明させていただきます。よろしいでしょうか？」

「あいよー」

「わかりました」

「まず明日の午前中、勇者様には再びリスカル様に稽古をつけていただくことになっております。これから基本的に毎日そうなるご予定なので、ご了承を」

「ま、毎日……」

孝太が引いている……余程キツかったんだな、あれ。

……………ザマア！

「ジン様は午前の間は自由時間となっております」

またこりや適当だなおい。

「明日の午後13時。お二人には再び国王様に謁見する形となっております」

……またアレと会わないといけないのか。

「今度はなにをするんだ？」

「明日は勇者様の従者発表となっております。その後は夜まで、そのチームで自由時間となっております」

なるほど、ね。みんな仲良く頑張れってか。

……くだらない。

「明後日からの午後は基本的に毎日、お二人共チームでの自由時間となります。互いに何かを教え、教えられ。そのようなことを目的として作られた時間ですのでご理解ください。ここまでで、なにか質問はございますか？」

「俺はないな」

「俺もない」

「そうですか。直に、力試しとして上位の魔物の討伐を国から命じられることとなりますので、ご了承ください。魔王討伐へと旅立ちの日にちは今のところは決まってはおりません。以上です」

……魔物の討伐、ねえ……。

つまりは、殺し。生き物を殺せてことだよな。

……勝手に呼び出しておいて、自分達で倒しに行かない、か。

本当に良いご身分だな、この国のクズ共は。

「そうかい。んじゃ俺は部屋に戻るからな。また」

「ああ。また明日な、仁」

孝太の部屋を出て、音を立てないようにその扉を閉める。

……さて、と。とりあえず召還陣を確認しに行く深夜まで、なにしようかな……。

午前0時30分。

俺は魔法で照らされたの部屋の明かりを消し、窓を開け放つ。
冷たい風が頬を打ち、少しだけ体が震える。

「うわ、暗っ……落っこちないかな、コレ」

ここは二階の客室のため、飛び降りることはあまりおすすめでない。
というか、屋上が目的地なので飛び降りる必要性がなに一つとしてないのである。

表の扉から出てもいいけど、人に見つかる厄介だから……。

城の側面の石壁には、結構な数の隙間が存在している。今日確認していたので間違いない。

暗くてよく見えないながらも、分析魔法で、魔力の角度から壁の形を推測して足を掛ける。

「意外と便利だな……コレ」

……下を見るな。上だけを見て行こう。

「……神の瞳、ね」

……とりあえずかなりの時間をかけて壁を昇りきり、なんとか屋上に到達。

ただいまの時間。午前1時20分。

「……よし。誰もいない……と」

さて、この魔法陣を隅から隅まで調べさせてもらいますか……。……本当に送還ができるのかどうか、とか調べないとな。

俺はゆっくりとその巨大な魔法陣に近づき、中央に立つ。

「……分析、開始」

魔法陣に魔力を流し込み、存在を『把握』。効果を『解明』し『理解』する。

「超身体能力、超再生能力の付加……これは予想通りだな」

さらに分析、解析……

「無駄に大き過ぎだな……『烏の眼』でも使えば一瞬で理解できるんだらうけど」

『烏の眼』は、幻惑の魔力を目に集めるアレである。

「……やっぱ召還しかできないみたいだな。予想はしてたけどなんかつら……い……!？」

適当に調べていただけだった。

特に何も考えず特性を把握しようとしていただけだった。

……なにがあっても、おかしくはないはずだった。

けど……こいつは、なんだ………コレは………！

「なんだよ……なんなんだよ！ コレは！」

……送還はできない。それはいい。それはもう、気にしていない。

けど……コイツは……この最悪な効果は、なんだ………！！

「『洗脳』魔法って……なんなんだよ………？？」

洗脳？ 洗脳だって？

『この国に命の限りを尽くす』？ なんなんだよそれは。ナンナ
ンダヨコレハ………！！

「……………孝太は………アイツは………！」

この国に、ただ持て遊ばれてるだけだったのか？

……………ふざけるな。

ふざけるなふざけるなふざけるな!!

なんで! どうして!? 孝太がこんな目に合わなくちゃいけないんだよ!!

「……まだだ。もっと、寄越せ!」

寄越せ……寄越すんだ。

確実な情報を。この呪いを解く方法を!

勇者の……真実を!

「『烏の目』、発動!!」

『勇者様、魔王を倒してください』 『この国のために命を捨てるのだ』 『呪われた勇者よ……哀れな』 『俺はこの国のためなら、いくらでも命を捨てるよ』 『助けてくれ、勇者様』 『………ありがとう』 『リン……逃げろお……このままじゃ、俺はお前を……』 『その呪いが解ける者など、いるわけがない。魔王ですら解けない呪い

なのだ』『幸せだよ、俺は』『貴方を、助きたい』『いつかまた……会いたいな』『死ぬのか、俺は？　まだ、復讐も果たせぬままに……？』『死ぬな！』『なあ、リン……俺を、殺してくれ』『何度だって繰り返す。いずれ来る、復讐の時のために』『ごめん……ありがとう』『なら、僕も人生を捨てよう』『大好きだよ』『君を手伝おう』『この国への復讐のために、この世に魔王を残そう』『神の定めた運命だよ』『もう、戻れないんだよ……』『勇者召還なんて魔法の存在は、俺が許さない』『殺したく……ない、のに！』『ああ……どうやら僕も、もう終わりみたいだ』『ほら……笑ってくれ』『勇者が魔王を倒すのは当然だろう？』『哀れな小僧だ』『復讐は、終わらない』『もう……眠るよ』『また会おう。次の世代で』『俺を運命に縛り付ける。たとえどんなに永い時間が掛かろうとも、必ず復讐を果たすために』『……カイト』『前に立つのなら、殺す』『必ずまた会いにくるから……だから』『泣くな……また会えるから』『違う！　俺は洗脳なんて……』『貴様が我々に逆らうことは、出来ない』『認めない……俺は認めないぞ。こんな運命を……』『俺は……勇者なんだ』『またなのか……また、俺は……』『ごめんね……カイト』『竜殺しか……』『また会いましょう』『死者蘇生の魔術だよ』『人質か……！』『似ているね、君と僕は』『本当に哀れだな……俺は』

『許さない………！』

俺は忘れない。絶対に！

いつか必ず、俺はこの国に復讐を果たす！』

” 思いだしたか？ 巡りに廻ったいつかの『俺』よ”

” 全ての怨みを。全ての決意を。ハジマリの決意と……復讐の運命を”

” もし思いだしたのなら……やっと思まれるんだ”

” これまでの全てを懸けた……幾つもの人生の復讐を”

” さあ、始めよう、運命への抗いを………全ての運命への、復讐を”

”これが真実だ……ジン・アカサキ”

[illegible]

はははははははハハはハ！！ 思い出した思い出した！！
！！ 全てを！ 俺の……全ての『勇者としての記憶』を！ アあ
ハハハはははは！！」

……俺は、ここまで、やって来たんだ……！

やっと……ここまで！

九つの人生全てを犠牲に、やっとこの時が来た……。
勇者の呪いに捕らわれず、この世界に来た……！

「許さない……絶対に……」

だから俺は、復讐を……。

そうだよ。そうだったよなあ！

くくく、くはははははは、あアはハハははははははははははハハ
ハ！！」

……さあ、永遠の勇者の運命を終えた、復讐の時だ。

「俺を裏切った、この国の全てを……滅ぼしてやる」

第八話 復讐者、覚醒（前書き）

はい、今回さらにジン君はキャラ崩壊します。
あと、結構醜悪な内容に……。

第八話 復讐者、覚醒

ずっと待っていた。この時を。

初めて勇者として召還された時から、永遠に待ち続けていた。

「アはは……くく……」

この国は、何度も俺を裏切ってきた。
何度も。何度も何度も何度も！

「もう、殺す相手を選ぶなんてことはやめよう。
レンカと孝太以外、全員殺せばいいだけじゃないか」

殺したい。残酷に。醜悪に。
全ての復讐のために。九つの人生の、復讐のために。

「兵士も騎士も魔法使いも平民も貴族も王族も……全て殺せばいい
だけじゃないか」

迷う？ なにを？

ありえない。俺の九つの人生全ては、この復讐のために生きていたのだから。

「……さあ、もう部屋に戻ろう。もう眠い」

焦ってはいけない。
慎重に。確実に。俺は進もう。

全ての復讐は、ここから始まるんだ。

「……なにをしてるの」

「……」

声が、聞こえた。

高い声。未だ聞いたことのない声。

いや、違う。今日聞いたな。

「……どうしたんですか、宮廷魔導師、リヘナ・リズトヘラインさん」

「それはこっちのセリフだよ、今代の勇者の従者、ジン・アカサキ」
振り返った先には、魔導師のローブを着込んだ、今日魔法修煉場で一度だけ言葉を交わしただけの少女が立っていた。

翠色の髪と目。耳が長く、いわゆるエルフという人種だ。

九つの勇者の記憶のお陰で、俺にはそれがどんな生物なのか理解することができる。

……理解できるが故に、どれだけ危険なことなのかも……わかる。

いくら九つの勇者の記憶があるとはいえ、勇者に魔法は使えなかった（聖剣に常に魔力を取られ続けて、安定ができないため）から、今の俺にはあまり意味がない。

俺が今使えるのは、上着の内に隠した『ある物』と分析魔法。それだけだ。

「君、魔法陣を分析していたね」

「してない」

「嘘を吐くな」

なにが目的か……。

……口封じ、か？

……なんとか逃げられないか……。

「洗脳魔法……呪いのこと。召還魔法の秘密、君は知ってしまったみたいだね」

「だったら、どうする？」

「殺す」

その直後、ズバツという切断音と共に……俺の左手が、斬り落と

された。

「あ、ぐう！！？？　ガあああああ！！？？」

「秘密は守らないといけないからね。僕は君を、殺さなければいけない」

……俺を、殺す……だと。

やっとここまで来たのに？　やっと復讐が始まるというのに？

……それに、こいつはこの『呪い』のことを、知ってたんだよな？
知ってて……なにもしなかったんだよな。

そんなやつに……俺が？

「誰が死」《舞えよ風。敵を斬り裂く刃となれ。飛風刃》ウインドカッター「っ！？」

左足の膝、脇腹、右肩を斬り裂かれ、俺は声にならない悲鳴を上げる。

血が流れ、下の魔法陣へと滴り落ち、魔法陣が鈍く光り出す。だが、それだけでなにも起こらない。

魔法陣が暗闇を照らし、屋上が鈍い光に包まれる。

「く……そ……」

……俺は……死にたくない。

死にたくない、死にたくない！　死にたくない！！！！

やっとここまで来たんだぞ？ 何度も勇者として生きて、やっと来たんだ。

なのに……なのに死ぬわけには……！

「くらえええええ！」

右手を上着の内側に入れ、俺は『ある物』……拳銃を手に持ち、リヘナへと銃口を向けた。

……引き金を、引く。

【ガウンツツ！！！】

景気の良い音が響き渡り、音速を越える鉄の塊が相手へと迫る。

「っ！？」

避けられた、か。

「うおおああああああ！！！」

撃つ！ 撃つ！ 撃つ！

腹を突き破り、腕を貫き、足の付け根を抉る。

「くう……！！？」

しかし運はそう良くも続かない。

ウインドカッター

「《飛風刃》！！」

「な……ぐあ！？」

右手が切断され、ボトツという音と、拳銃と共に地面へとずり落ちた。

血も大量に噴出し、それに伴い次第に視界も不明瞭になっていく……。

「許さない……私に怪我を負わせるなんて」

「はっ……そんな、覚悟も……無かったの、かよ……！」

手が、ない。両手がない。

拳銃が持てない。これじゃ戦えない。

どうすればいい。 どうすれば……？

「っ！？」

直後、右腕に激痛が走った。

今までにない痛み。切断を越える痛み。

ゆっくりと目を動かし……俺は見た。

……右肩から先が、何も存在していなかった。

「うぐウああアああああアああああ！！……？」

「無様に死ね」

右足の肉が半分飛ぶ。左足の先が切断される。腹の一部が無くな

る。右目が、無くなる。喉が……潰れる。

痛い……痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！

痛みに耐えきれず、俺はそのまま地面に倒れ込んだ。

倒れた俺の目の前には、残骸が広がっている。

俺の体、肉の残骸……。

……叫ぶ気力は、もうすでに存在していなかった。

どうでもいい。なにも考えられなくなってきて、眠くなってくる。

……何度も体験した、『死』の瞬間だ……。

「はあ、はあ……僕の、勝ちい……」

「……あ……う」

「あは、ははははは。あー……血でベトベトだよ。洗わない、と……」

……リヘナが、重い足取りで屋上の出口へと歩いていく。

それを見つめながら、思う……。

……俺は、死ぬのか？

また、繰り返すのか？

また、勇者として生き続けないといけないのか？

また、復讐が果たせないのか？

……嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！

俺はもう繰り返したくない。

だって、やっとここまで来たんだぞ？

やっと、全てを思い出したんだぞ？

なのに、死ぬ？

フザケルナア！！！！

俺は……俺はア……！！

「死ヌわけニば……行がねェンダよ……！！」

痛む喉のせいで上手く言葉が言えない。

それでも、俺は叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ……。

けど、体中が痛い……起きあがることさえ、困難な程に……。

……でも、冷静になってみれば、そんなもの……本当に問題になるのか？

痛い？　それがなんなんだよ。

どうでもいいだろそんなこと。今はあの女を殺す。それだけだろ？

痛いのなら、動けないのなら……騙せ。

『幻惑の魔力』を纏え。自分に幻術を掛ける。
痛くないって。動けるって。

自分を騙せ！　全てを騙せ！

諦めるな。俺はやれる、俺にしかやれない。

俺はあ……俺はなあ……！

「俺ハあ、『アヴェンジャー復讐者』ナンだ」

だからやれる。俺ならやれる。

立て。立ち上がれ！　走れ。走り切れ！

ほら、あの女はまだこちらに気づいてない。あいつはいま後ろを

向いてる。

アハハ、バカな奴だ！

俺が後ろにいるってのに！！

「ぐひっ、ふひひひひやひやはひひやふひっ、ぐひやひひひ」

さあ、行こう。殺しに行こう。

一歩ずつ。確実に。殺しに行こう。

「アヒヤ非刃非非ヤ負非やハ刃非非非火ヤハ刃、亜非や比ヤ非比非刃ハ刃！！」

殺してみよう。

殺してやろう。

殺して見せよう。

何度でも。何度だって。

殺してあげよう。

だって俺は、『アウエンジャー復讐者』なんだから。

「……非火比」

グチャ、グチャグチャ……。。

「日や比非！」

バクツ、グチャ……。

「キィ火比刃非ヤ非亜非ヤ火比!!」

……食べる。俺は、人を食べている。

さっきまで俺を瀕死に追い込んでいた相手を、食べている。

「火比非ヤ非刃非……ゴフツ……亜刃非ヤ火比」

食べることに躊躇はない。だって、食べれば強くなれるんだから。

俺は、禁術『死を喰らう者^{デッドイーター}』で【力】を食っているんだから。

「亜非非イ非ヤ非刃火比歩亜非ヤ火比!!」

……そうだ。俺は強くなってるんだ。

強くなって、絶望を振り撒くんだよなあ？

復讐を、するんだよなあ？

……なら、まだ死ぬわけにはいかねえよなあ……。

どれだけの怪我を負おうとも。

どれだけの傷を負おうとも。

俺は、まだ……

俺は、もう……

死にたく、ないんだよ……！！

「……………」

そう……だ……お、れ……は……ま、だ……
死……に……た……く……な……た……。

……………。

……………。

……………。

【ガチャ……】

「……………ジ、ン？」

第八話 復讐者、覚醒（後書き）

ジン君、既に本格的な狂人ですねー……。。

後、別にジン君が死んで終わりなわけではないです。

【ちゃんと】続きますから安心してください。

第八・五話 死者蘇生の禁術（前書き）

はい、今回はレンカさんがまあまあキャラ崩壊します。
……すんません。悪気はないんです……。

P. S. 今回はずっとレンカ視点です。

第八・五話 死者蘇生の禁術

） Side…レンカ・アルスレイト ）

「……………ジ、ン？」

……私は屋上から聞こえた微かな叫び声のせいで目が醒めました。
本当に小さく聞こえただけでした。
耳を澄ましていなければ、わからないくらいに。

でも、私には聞こえました。私には誰の声か理解することが出来ました。

それが、誰の声かということが……理解できました。

私は着替えて、急いで屋上に向けて走り出しました。
廊下を走り抜けて、階段を昇りきって、屋上の扉に手を掛けて……

彼は……、ジンは……

血塗れで、体の半分以上を損失させて、誰か同じように血塗れ人
の上で倒れて……死んでいました。

空気が冷たい。風が冷たい。全てが……冷たかった。

ジンの死体を見つけてしまって……胸が痛くなる。

悲しいって……ジンを殺した人が憎いって……そう思いました。

「……イ……やあ……」

……嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

認めたくない。ジンが、死んだなんてこと。

「わ、たし……は………?」



初めて彼と会った時、私は二人に向かってこう言いました。

「勇者様、よくぞ来て下さいました」

……今考えてみれば、凄く自分勝手な一言だと思います。

勝手に呼び出しただけなのに。

人の人生を、私が壊してしまったというのに。

……そして、彼は言いました。

「想像してみなよ。そう、例えば……ここは決して逃げられないサーカス場だ。自分はただ、役目をこなす『商品』でしかない。そんなところに連れてきた張本人どもを恨まないと思うか？ そんなことはあるわけない。俺なら恨む。俺なら足掻く。俺はピエロなんかじゃなく、人間だから」

……『商品』。

自分の考えを持たず、ただ役目をこなすのみ……。

私にピッタリだと、私そのままだと思いました。

誰かに褒めて欲しくて、言われたことをやり続けていた。

みんなに褒めて欲しくて、命じられた勇者召還を頑張った。

そこに私の意思は、なにひとつとして存在していない。

他人の言うことをこなすことしかできない。

それは酷く滑稽でした。

それは酷く醜悪でした。

他人に寄り掛からなければ、生きていけない。

……私は、自分の考えを貫き通せているジンを、羨ましく思いました。

次の日。お二人が父様への謁見を終えた後、気まぐれに城の裏庭に足を運んでみると、ジンを発見しました。

私は彼に話しかけて、近づくこんなことを言われました。

「どうした姫様。孝太のどこにでも行かなくていいのか？」

……姫様と呼ばれて、少しだけ違和感を覚えていました。
なので訂正をお願いすると、

「なんか大した違いあるのか……？」

……実は私にもよくわかりません。

そうして難しく考え込んでいますと、彼は良いことを思いついたとばかりにこんなことを言い放ちました。

「じゃあさ、俺に魔法教えてくれない？」

……正直、驚きました。

私は誰にも頼られることがなかった。召還魔法だって、本当は妹がやったとしても問題はなかった。私が、褒められたいがために……勝手にやっていただけだった。

代わりのある、道具。

居ても居なくても変わらない、肩書きだけの王女。

……そんな私を頼ってくれることが嬉しくて、私は、この人と仲

良くなりたいてって……ずっと前に諦めていたことに、また希望を持ちたいって……そう、思ってしまった。

そんな私の気持ちが……凄く辛かった思いを……

私は、初めて『対等』に接してくれたジンに、思うままに言い放ってしまった。

……嫌われたかもしれない。

私は、酷く弱いから。

一人じゃ耐えられないから。

ジンも、私の勝手な思いを聞いて引いてしまったかもしれない。

……そう、思っていた。

なのに彼は、なんでもないかのように私に優しくしてくれた。慰めてくれた。

同情じゃないと思う。ジンは、凄く自分の気持ちに正直な人だから……。

……もし、これがただの依存だったとしても……。

……もし、これがただ人恋しかっただけだったとしても。
……もし、これがただ狂っていただけだったとしても……。

ジンに名前と呼んで貰って、頭を撫でて貰って、楽しく会話をし
て……私が彼を好きになった事实は、変わらない。

たとえそれがどんな理由だとしても。

私は……………。

それ、なのに……………。



「あ……………ああ……………」

舌が上手く回らない。気持ちが悪く落ち着かない。涙が止まらない。

……どうして、こうなったの？

どうして？ どうして どうして どうして どうして どうして
て どうして どうして どうして どうして どうして どうして ど
うして どうして どうして どうして どうして どうして どうし
て どうして どうして どうして どうして ドウシテドウシテド
ウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシ
テドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテド
ウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシ
ウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシ
テドウシテ？

ドウシテ、コウナツタ？

「どうして……？」

ふと。

ふと、私はジンの『異様』差に、少しだけ気づいて近寄った。

血の臭いはまったく気にならなかった。ジンのことで頭がいっぱいで、他に考えがいく余裕がなかったからなのかもしれない。

私はジンに近づき、しゃがんでみて……あることに気づいた。

「魔力が……荒れてる？」

そう。魔力の流れが、『自然』とは似ても似つかない『異常』だったのだ。

特に、ジンの周囲の魔力が。

まるで、『狂気』に渦巻いているように……。

「っ！ ……………」

その原因に、私はすぐにたどり着いた。

同時に、ジンを助けるための方法も……思いつきました。

「……そうですよ。そうですよ、そうですよ！ ……そうですよ！！
あるじゃないですか！ ……ひとつ……一つだけ、ジンを生き返らせる
方法が……！」

……そうだ。たった一つだけ、ある。

許されざる魔法。忌むべき魔法。禁忌とされている魔法。

禁術『死者蘇生』
ネクロマンシー

かつての勇者が仲間を引き連れて命辛々倒しきつたと言われる死
霊魔術師、魔王に匹敵するとまで言われた禁術使い『ブエルヘルト・
エルハラン』の負の遺産。

アンデッドを生み出す魔術として既に開発されていた『死霊魔術』
ネクロマンシー
を『死者蘇生』へと進化させた天才大魔導師だった。

彼は両親を戦争で殺されたと言う。

彼は妹を国に殺されたと言う。

彼は兄を魔物に殺されたと言う。

彼は恋人を、治るはずの病気なのに、見捨てられて失ったと言う。

なんて悲しい人生なんだろう。

なんて理不尽な人生だったんだろう。

彼は必死だったのかもしれない。

もうなにも失いたくなかったただけだったのかもしれない。

……それでも、それがたとえどんな理由であろうと、私は構わない。
い。

ジンが生き返らせられるのなら……禁術だって、望むところです。

「ジン……絶対に、私が生き返らせますから……」

だから………

私とずっといっしょにいてください……………。

大好きなんです、ジン。

第八・五話 死者蘇生の禁術（後書き）

もう少し……もう少し進めば、やっと復讐の話まで行ける……。

第九話 狂い続ける二つの意思（前書き）

……なんだか、暗いシーンは、書いてるとテンションが下がってくるなあ……。

第九話 狂い続ける二つの意思

……初めてこの世界に呼ばれた時、俺は洗脳を……『呪い』を受
けずに、この世界に降り立った。

まだ、初めて起動する魔法にはその効果が積まれていなかったか
らだ。

……奴は。この国の、当時のアルスレイト王国の奴らは、勇者と
して召還された俺を戦争の道具として使い始めた。

許せなかった。許すわけにはいかなかった。殺してやりたいと思
った。

だが、それは叶わない。巻き込んでしまった妹を人質に取られて
いたからだ。

そしてそのまま俺は当時流行っていた不治の病に懸かってしまっ
て、国に捨てられたんだ。

……復讐は、その代では果たすことが出来なかった。

だから、俺は自分をこの世界に縛り付けることにした。

勇者召還の魔法陣に俺の個別情報を登録し、この魔法陣から人を
呼び出す場合は俺が優先的に選ばれるように仕掛けを施した。そし
て同時に、記憶を取り戻すための魔法も……。

……俺は自分を、復讐の運命に縛り付けた。

次に俺は、ある『魔術』を創り出した。

即ち、『魔王を生み出す魔術』。

『全ての能力を底上げする』という付加効果の魔法。

勇者召還の術式をベースとして生み出したオリジナルの魔法。

発動条件。『勇者を世界単位で関知し、勇者が消えてから15年経つことで使用可能』

『この魔法は人間に怨みを持つ魔族にしか使用不可』

これにより勇者を戦争の道具としてではなく、魔王へと対象を向けさせることに成功した。

願わくば魔王にアルスレイトを滅ぼして貰っても良かったが……さすがに無理だったか。

魔族以外のほとんどの種族で同盟を結ばれたからな……。

この『魔王を生み出す魔術』の術式を魔族の国へと残し、初代勇者であった俺は……死に絶えた。

二代目から、『洗脳』の魔法が勇者召還に導入された。

……俺の仕掛けに気づかれたのではなく、ただ効率よく利用するために。

……復讐は、また果たすことが出来なかった。

『呪い』のせいで、俺はなにもすることが出来なかったんだ。

ずっとそうだった。ずっと転生と召還と死を繰り返してきた。

意味もなく。ただ、初代勇者の復讐の意志の元……何度も、何度も何度も！

沢山の仲間に出会った。仮染めの仲間だ。忌むべき仲間だ。殺したい。殺してやりたい。でもそれは叶わない……。

……だが、ある時……七代目勇者としてこの世界へと降り立ったとき……。

俺に、転機が訪れた。

それが……俺と、禁術使い『ブエルヘルト・エルハラン』の……かつての親友との出会いだったんだ。



……暗い。黒い。……冷たい。

何も感じない。意思も、感覚も、なにもかも。

……俺は、死んだのか……？

俺、は……………？

「っ……………！？」

ここ、は……………？

「……………ジ、ン……………」

「っ！？ レンカ！？」

暗い室内。部屋にある物の全てが隅の方へと寄せられており、俺はこの部屋の中央……ある魔法陣の中心で横たわっていたようだった。

恐らく、ここはレンカの部屋なのだろう。他に誰も居ず、窓の外からは星しか見当たらないことからここは高い階層なのだと判断し、そう推測する。

そしてこの部屋の主……第二王女レンカ・アルスレイトは、俺のすぐ側に立っていて、今まさに倒れ落ちるところだった。

すぐさま起き上がり、その体を支える。

「……ジン……ですよね？」

「ああ……そうだ。俺だよ、レンカ」

「……やり、ましたよ……わた、し………せいこう………しま、した」

……レンカの力無い泣き顔を見て、俺の中に段々と記憶が戻ってくる。

………そうだ。俺は全てを思い出して………そして、宮廷魔導師のあいつと戦って………重傷を負って、死んだんだ。

………そうだよ。俺は、死んだんだ。

なら、なんで俺はここにいる………？

どうして………。

「つ………レンカ………お前、まさか………！？」

慌てて周囲の魔法陣の構成を観察し、推測の答えに直接行き着いてしまった。

見覚えのある巨大な魔法陣。荒れ狂う、『異常』な流れの魔力。

………禁術『死者蘇生』
ネクロマンシー

だけど………これ………確か………

十人の生贄が、必要じゃなかったか………？

「……殺した……のか……？」

「……………はい。眠っていた何人かの兵士さん達に、生贄になって貰いました」

「……………くく……………あはハハは……………そう、か」

……俺のために、殺してくれたのか？

迷い無く？

躊躇無く？

星が見えていた。まだ朝にもなっていないかった。

そんな短時間で、決断したのか？

俺を、救うために…………？

「……………ありがとう」

頭を撫でて上げると、レンカは微笑んで俺に体を預けてきてくれる。

……………俺は、お前の国に復讐をしようとしているんだぞ？

……………なあ……………レンカ……………。

「なんでこんな……………こんなに必死に、俺を助けてくれるんだよ……………」

俺は復讐者なんだぞ？
アヴェンジャー

俺は、お前の家族共を殺し、国を潰すためにこの世界にやって来たんだぞ？

なんで……そんな、やつに……？

「ジンが、好きだからです」

好き。すき。スキ。

たった、それだけの理由で？

たったそれだけの理由で10人の犠牲を躊躇無く差し出し、忌むべき禁術にさえも手を出したっていうのか？

………なんで。

なんで。なぜ。どうして。

俺はお前から憎まれるべきなのに。

俺はお前に憎んで貰わないといけないのに。

「……………ごめん、レンカ……今はまだ、俺にはなにも言えない」

俺は憎まれるべきなんだ。怨まれるべきなんだ。

お前に、殺されるべき奴なんだ。

だから、俺はなにも答えることはできない……。

だって……お前は………俺を殺す……

「復讐者……ですか？」

「っ！？ どう、して……」

「……こんなに近くにいて……読心の魔法が効かないわけがないじ

やないですか」

……なる、ほどな……。

なんでもおみ通しってわけだ。

「……だったら、もういいだろう……俺を殺せばいい。そうすればお前は「嫌です！」」

「どうして！ 俺は全てを壊すためにここにやって来たんだぞ！ お前の、全てを壊すために！」

怨むはずだ。憎むはずだ。

俺は二年前、両親を強盗に殺された。

だから憎んだ。だから怨んだ。だから銃を奪って、殺してやった！

俺は、あの時の強盗と同じなんだ。

レンカだって……きっと俺を……！

「私に……好きな人を怨むなんてこと、出来るわけじゃないじゃないですかっ！」

「っ……」

好き？ 俺を？ どうして？

理解できない。俺は、復讐者なんだぞ？

アウエンジャー

リンじゃあるまいし、俺を好きなんてこと……。

忌むべき相手を好くなんてこと、あるわけが……あつていいわけがない！

「私は……きっと狂っているんですよ」

狂う？ どうして。なぜ。

「……凄く寂しかったんですよ」

寂しい？

「ずっと一人だったんです……誰も私なんて相手にしてくれなくて

……凄く、寂しくて……。

ジンが私に話をしてくれるまで、ずっと一人だったんです。そう

……言いましたよね？」

「でも……それでも！」

たったそれだけの理由で……どうして。なんでなんだよ！

俺は………

「……ジン……！」

「っ！？」

……唐突に、レンカの顔が目の前に迫ってきて、思考の中断は余儀なくされてしまう。

反射的に体を反らしてしまったが、レンカはさらに詰め寄ってくる。

「レン、カ……?」

そしてそのままレンカは目を閉じて……唇を重ねてきた。驚きに、目を見開く。

レンカは止まらず、そのまま俺を押し倒して……顔を上げた。

涙で濡れている、その顔を。

「私にとって、貴方は私の全てなんです」

「……」

「私に手を差し伸べてくれた、ただ一人の、大好きな人なんです……」

……狂っている。狂ってしまったている。

変わらない。何もかも。

いくつもの人生を捨てた復讐者と、狂いに狂った一人の少女。

………本当に。

本当に……この世界は残酷だ。

何処よりも。なによりも。

残酷で、醜悪で……。

こんな運命が……決めつけられていて。

俺は………本当に………

「本当に哀れだな……俺達は」

第九話 狂い続ける二つの意思（後書き）

もっと上手く文章を書けるようになりたい……。。

第十話 騎士団の実力把握（前書き）

はい、今回は戦闘とも言えない戦闘をします。本当はもつと緊迫した勝負が得意（比較的に。下手なのはわかっています）なんです、それはまた今度。

今回スムーズに書けたのでいつもより長いです。

第十話 騎士団の実力把握

ボロボロに倒れた青年を見おろし

『呪われた勇者よ……哀れな』

彼はそう言った。



翌日。早朝。

傷は完全に全てが完治していた。

さすがはブエルヘルト・エルハラン……ブエルの禁術だ。傷跡すら見当たらない。

ああ、言い忘れていたが……俺の使う『死を食らう者^{デッドイーター}』もアイツから教わったものだ。

この禁術は、使うと代償に『狂気』が体を蝕み始める。俺があんな風になっていた半分はこれのせいだ。

七代目の頃は、この『狂気』で洗脳の呪いを衝突させて、一時的に正気を取り戻せていたんだよな。

話を戻そう。

『死を喰らう者』の本来の効果は、【力】の吸収にある。

相手の体を喰らうことで能力を取り込み、自分を強化する。

喰ったあの宮廷魔導師さんは、魔法が得意っぽかったので最大魔力と魔法威力が結構上昇した。

身体能力などの変化は微妙だ。もっと吸収しないと駄目だ。勇者時代と比べてかなり見劣りする。

まあ、あの頃は勇者召還の恩恵があったからな……忌々しい限りだが、あの魔法はかなり強力だ。究極魔法の一つと言ってもいいくらいだ。

俺も魔王を創る術式を開発させたけど……うん。勇者召還をベースにしたとはいえ、あれに劣らないようにするのは大変だった。

……復讐の最後で、あの勇者召還の術式は壊さないといけないな。

「おい、どうした仁。ボーツとしてるけど大丈夫か？」

っと、回想はそろそろやめるか。

「大丈夫だ」

現在、俺と孝太は食堂で騎士団といっしょに食事を取っている。

レンカは、なんか王女の業務があるらしい。内容知らんけど。

今回、俺も志願して剣の稽古に参加させてもらうことにした。相手の力量……特に、騎士団長リスカルの実力を正確に把握したいからだ。ついでに勇者の孝太も。

俺も勇者時代は剣で戦ってたからな。九代にも渡って……な。だ

から、おそらく正確に計ることができるはずだ。

良い機会だから聖剣についての詳しい説明もここでしておこう。

孝太の持つあれば、聖剣【エクスカリバー】である。
なぜ勇者にしか扱えないか。理由は簡単である。

剣が重すぎるのだ。

3 mほどの岩さえかなり簡単に持ち上げられる力を持つ勇者が、
聖剣を普通の直剣くらいの重さを感じると言えばわかるだろうか。
凡人では持ち上げることすら叶わない。

さらに聖剣には、所有者の魔力を常に吸い取り続けるという特殊
な力を持つ。これにより魔力が安定しないため、魔法を使うことが
できない。これが勇者は魔法を使えない理由だ。

ちなみに『死を喰らう者^{デッドイーター}』は、実は魔力を使わない。
敢えて言うなら、使うのは精神力だ。説明した『狂気』も精神に
関係してるだろ？

次に聖剣の効果なのだが、これはもうチートだ。

まず、魔力を光に変換して放てる。ただの光ではない。ビームみ
たいなヤバイものだ。

それを爆発させて範囲的に相手をぶっ殺せたり、刀身を光を伸ば
して10 mくらいにできたり（重さそのまま）、拡散状にもできる
し集約もできる。

敵はもちろん一瞬で死ぬ。もう仲間いらないうんじゃねと感じるく
らいに。

ついでの効果としては、剣に人格があることくらいか。アイツ…
…俺は嫌いだ。

まあ、聖剣の説明はこんなところだろう。

「騎士が十人も行方不明…それに宮廷魔導師も…なあ、これ、
どういうことだと思う、仁」

孝太がそう言って、俺の方に向き直る。

この話は、朝二人してメイドさんから聞かされた話だ。どうやら
バレてないらしい。話が出た時はさすがに身構えたが、大丈夫そう
だったので安心した。

……メイドさん、か。屋上でのあの速さ、そして未確認の魔法（
おそらく錬金術だ。速攻で靴を作り出したのだろう）はきっと驚異
になる。おそらく、誰よりも……。

もっと強くななくちゃいけない。俺はまだ、きっとメイドさん
には勝てない。

「さあな、俺が知るか。でも、気をつけた方がいいかもな」

「そうだな、俺たちもその暗殺に「違えよ」」

「ほう……違う、とは？」

俺が孝太の言葉を遮り、孝太が間拔けな顔をしているところでリ
スカルがそう問いかけてきた。

「あんたはわかってんだろ。俺と孝太が気をつけるべきなのは、こ

の国の奴らだよ」

「な……！？ おい仁！ それはどういうことだよ！」

「うるさいな、説明してやるから黙ってろ。」

いいか？ 俺たちは二日前……つい最近召還されたばかりだ。さらに勝手に呼び出された被害者の立場……。

普通なら反抗の念を抱くだろ。お前は無かったけどな。

んで、呼んだ直後にこうなったわけだから、まず俺たちが疑われる。

犯人が見つからず、行方不明がそのまま続けば……最悪、暗殺だな」

孝太が反抗の念を抱かないのは『呪い』のせいだがな。王と一部の奴らも、そのせいでこういうことを起こせないのはわかってる。

だから、本当は俺たち二人ではなく、俺だけが必然的に疑われるわけだが……。

「暗……殺……」

「幸いこの食事に毒が盛ってあることはなかったけどな。」

……けど、俺たちは今、監視されてる。これが疑われてるという確率を100%に引き上げてる」

そうなんだよ。今日は起きてすぐ、視線を感じた。

試しに解析の魔術で周囲を確認してみたが、2人のやつらに監視されていた。

もちろん、俺ただけけどな。

「よく気づいたな。監視もそうだが……毒はどうやって調べたんだ？」

リスカルが悪びれもせずになんか聞いてくる。どうやらこいつは全

てを知っている敵だということが確定した。『俺だけ』を監視していることを知っているのだから、必然的にそうなる。

「ああ、食堂のおばちゃんに毒味させたからな」

実際は解析の魔術を用いたわけだが。

「ヒドいな……」

「お前らにそれを言う資格はないだろ。殺そうとするんだからな」

……マズい。記憶を取り戻したせいか、王国の奴らと話す時はどうしても拒絶を隠しきれない。
冷静にならないと……。

「孝太もいつまでも惚けてないで、さっさと食べろ」

孝太が俺たちの会話を聞いて惚けている内に、俺とリスカルはもう食事を終えている。周りも食べてる奴らは減っていて残りはかなり少ない。

「あ……わ、悪い」

「しっかりしろよ、勇者さ……いや、孝太」

勇者様。かつて呪われた勇者だった俺はそう呼ぶことを皮肉と感じられて……気づけば言い直していた。

まあ、いいだろう。首を傾げてはいるが大して気にしていないみたいだし。

そうしてリスカルと共に待ち続け、食事の時間を終えて訓練へと入っていった。



「今日の訓練には、勇者コウタの従者であるジン・アカサキにも参加してもらうことになる。容赦なんてしないでいい。ビシバシやってくれ。以上だ」

「「ハッ!!」「ハッ!!」」

おい、鬼畜だな。

俺まだこの世代じゃ一度も剣なんて握ってねーんだぞ。少しくらい容赦はしやがれ。

……まあいいや。とりあえず孝太とリスカルは後回しだ。まずは雑魚騎士共でウォーミングアップだな。

「誰でもいい。誰か俺と戦わないか？ なんならハンデくれてやってもいい」

バカにした態度を、わざと取る。格下と思っている相手にそう言われるのは気に食わないだろう。

案の定、騎士達の空気が悪くなった。陰口を叩く者もいる。

孝太も「言い過ぎだ」とか言ってくるが無視だ。どうせ戦うんだ。本気でやってほしい。

「生意気な奴だ。いいだろう、俺様が相手をしてやる」

うわ、俺様とか言う馬鹿マジでいんのかよ。こういう奴って大抵
噛ませ犬なんだけどな。

「んじゃ戦^やろう。真剣と木剣、どっちでやろうか」

「真剣だ。格の違いを教えてやる」

……仮にも、九代にも渡って勇者をやってきたんだけどな。それ
だけ剣を扱ってきたんだ。こんなモブとは確かに格が違うよな。

「そうだな、とりあえず俺は左手使用禁止。このハンデでいこう。
格の違い、この程度で埋まるかな？」

「てめえ……!!」

「なめてるとでも？ 冗談言うなよ。格下相手に本気を出す必要も
ないだけさ」

「殺す！」

俺様騎士が隣の騎士から直剣を受け取り、俺に向けて走り出した。
それを見て目を細め、俺も同じように直剣を受け取り、だらんと
力無く持ち前掲姿勢を取る。構えもしない。

それを見て馬鹿にしているとでも感じたのか、さらに相手は激高
する。

「ハアーーーー!!!!」

ただ単純に。力任せに。俺様騎士が剣を振り下ろす。

こいつはやはり馬鹿なんだろうか。こんな単純なもの攻撃にすら
なっていない。

とりあえず剣を斜めに構え、受け流す。

「弱いな、いやマジで」

「このッ!!」

即座に下から振り上げてくるが、同じように受け流す。

「なんで騎士やってんの、あんた」

「うおおおおおお!!」

突き。振り下ろし。振り上げ。横風ぎ。袈裟斬り。逆袈裟斬り。
振り回し。

ただ速いだけだ。俺の足元にも及ばない。すぐに決着を着けることもできるが、俺はただ受け流し続ける。

……弱すぎる。一部の魔物ならこれで簡単に殺せるだろうが、知恵を持つ相手が敵の時は楽にやられそうだ。

こいつ、対人戦しつかりやってんのか？　こんななら、使いやすい槍にでも武器を変えろよ。

「くそっ！　なんで当たらない！」

「単純すぎ」

俺様騎士の振り回しを大きく弾き、蹴る。

同時に、全身の力を足に移動させていたのでかなり吹っ飛ぶ。なにこれ楽しい。

二人に距離が開き、互いに構え直す。俺は前掲姿勢でだらんと剣

を下に垂らして持っているだけだが（これが俺の基本の構え方だ。長時間戦うためになるべく疲れない戦い方を追求してこうなった）。

俺様騎士は呼吸をかなり乱しているようだが、特に俺は変わらない。というかまったく疲れてないんだが。

気づけば周りの人達は訓練をしていなくて、俺とこいつの戦い（というか一方的な遊び）を観戦しているようだった。

「ハア……ハア……この、野郎が……ッ!!」

「悪口思いつかないなら言わなくていいよ。格好悪いから。つか負けゼリフだぞ」

「くそ！　くそ！　なんでこ【ガンッ!!】グア……!!？」

もう目障りなのでとっと終わらせようと思い、全身の力を足に集め一気に駆け出して、俺様騎士の額を剣の柄で強打して気絶させてやる。すぐ倒れたし、反応もできていなかった。

……なんて弱いんだ、こいつ……。

「おい。誰かこの泡吹いてる奴どっか運んでくれ」

適当に観戦してた騎士共にそう言い放つと、俺はとりあえず孝太とリスカルの元へ向かった。

あの俺様騎士は隅の方の日影で寝かされるみたいだ。もう出番はないが。

「凄いな！　仁！」

「いや……あいつ弱すぎるでしょ……」

結局フェイントを一度も使ってこなかったぞ。マジ弱い。
こんなのウォーミングアップにもならない。困ったな……。

「いや、かなり凄い方だ。剣の心得はあるのか？」

リスカルが聞いてくる。

「……あると言えばあるし、無いと言えば無い」

「なんだそりゃ。っていうかお前、剣道部でもないのに剣なんて振ったのか？」

「だから無^ねーって」

「じゃあどういことだよ」

言えるか。これは守るべき最優先事項の機密なんだ。

「剣の心得もないのによくあそこまでできたものだ。才能か？」

「知らん」

「勇者殿が最初に戦っていた時は、武器を向けられるのが怖くてなにもできていなかったというのに。真剣で無理矢理打ち合わせて続けて慣れさせたがな」

……………無理矢理、ね。

不快な感情が押し出し表情が変わりそうになるが、なんとか自重する。

「あ、あはは……でも、もうあんまり怖くはないよ」

「ふーん……なあ孝太、俺と戦^やらない？」

「は……？　む、無理無理！　あんな動きするお前に勝てるわけな

いって!」

へえ。なるほどな。つまり孝太は剣の腕が俺以下か。なら戦うことになっても聖剣の効果だけ気をつけてればいいか……。

「んじゃリスカル団長様、一戦やろうぜ?」

「……ふむ。それも面白そうなのだが、俺は勇者を早々に鍛え上げねばならんし、他の者にも経験を積ませないといけないしな……なら、フエイ!!」

リスカルが唐突に言葉……名前か? を叫び、こちらを見て言った。

「うちの副団長が相手になるよ。相当な実力者だ。俺にはまだ及ばないがな」

……こいつとはやっぱ戦えないか。しかたない。

そいつが楽に倒せれば、リスカルも倒せるか……?

と、考えている内に騎士達の波をかき分けて素早く誰かが目の前に飛び出してきて、言った。

「お呼びでしょうか、団長」

女の声だ。考えごとを中断し相手を確認してみる。

身長は俺よりやや低い程度なので170cm前後だろう。紺色の髪を肩胛骨辺りまで延ばしたストレートで、顔立ちは目付きが鋭い。こちらも目は紺色だ。

服装は周りと変わらない鉄製の訓練用鎧だが（俺は制服だ。頑張っ
て使い続けてる）、他とは違い一線引いて見える。鋭利な印象を
受け、客観的に見て美人と呼ぶにふさわしいと思う。特に俺はなに
も感じないが。

四肢は細い。が、結構な筋肉があるのはわかる。いわゆる細マツ
チョ？ いや、違うか。体付きは……文句がない。レンカの小さい
胸では比べものにならないだろう。というか戦う動きに支障が絶対
に障じてるレベルだ。大丈夫なのか？

孝太の方を確認してみるが、特に良い反応は見られない。相変わ
らず綺麗だなくらいにしか思っていないようだ。

……この女の人はチラチラと孝太に視線を向けているので、たぶ
ん好意を持っていると思うのだが……これは酷い。気づいて笑顔を
返しやがった。そこは無視してやれよ。

案の定、多少取り乱していた。

……孝太、お前はなんて鈍感なんだ。気づけ。

……ま、どうせ俺はこの人も殺すわけだし、孝太はこのままで構
わないか。

「俺と代わりにジン殿と戦ってくれないか？ 俺は勇者殿を稽古し
なければならんのでね」

「え、あ……ハッ！ わかりました！」

と、どうやらこの人が副団長のようだ。予想はしていたが。

副団長はリスカルに返事をする、俺に向き直って言う。

「副団長のフェイ・セラフルです。良い勝負にしたいと思う」

「今代の勇者コウタ・ヒサギの従者、ジン・アカサキだ。よろしくな」

どうやら勝負は確定事項らしい。

「んで、あんたはどうする？ 真剣か木剣か。ハンデはいるか？」

俺のこの態度で目付きが鋭くなり、睨んできたようだが……この程度の殺気、気にもならない。

だが、強いのは確かみたいだな。あの宮廷魔導師と戦った時は暗くて視界も良好ではなく、焦っていたし武器も拳銃しかなかった（ちなみに拳銃はレンカが回収してくれていたので定位置に仕込んである。弾があと一発しか残ってないから、近い内になんとかしたい）。けど今は……。

今なら、殺^やれる。

「真剣だ。ハンデなどいらん」

無愛想にフェイとかいう女は言い放ち、距離を取り剣を構える。

……無駄にしゃべらない辺りが、熟練の腕を感じさせている。

こりゃ、なかなか大変かな？ 奥の手を使うまでは保ってくれるかね。

「それじゃ……始めようか、副団長様」

いつものように前掲姿勢でだらりと腕と剣を下げた構えをしたまま言い放った俺のその一言で、この勝負は始まりを告げた。

第十話 騎士団の実力把握（後書き）

主人公、記憶が戻ってちょっと性格が荒っぽく……まあいいかな。
感想などが貰えると嬉しいです。

第十一話 副団長と魔装技の使用（前書き）

新技です。

あと今回はバトルが内容の大半です。

第十一話 副団長と魔装技の使用

青年は震える声で

『違う！ 俺は洗脳なんて……』

彼へとそう否定していた。



先手は譲ってやるとばかりに力無く構えていたが、相手はそれを用意にも介さずこちらの様子を伺ってくる。

そうなると必然的に空気が固まったように鋭くなり、ピリピリと焦がすような音が聞こえてくるような気さえもする。

沈黙。静寂。

「来ないのかい、副団長さんよ」

「どうやら君は『後の手』を取ることが得意のように見えた。だからこそ私は、動く気はない」

「……そう。つまらないな」

しかたなく自分から攻めてやることにし、一歩下がって重心を中心に移動する。

力無くその場で一秒ほどゆっくり前掲姿勢に戻ろうとした——瞬間、地面が爆ぜた。

全ての力を足に集約させ、重心の移動の瞬間も利用し一瞬でフェイの目の前まで達した。

が、相手はそれに驚くことなく対応してくる。

フェイは俺が右斜め上から繰り出した袈裟斬りを見切り、受け止めた。同時に鉄同士の高速度の衝突により、火花が飛び散り、ギンッという景気のいい音が周囲に響きわたる。

と、同時に重心を一瞬で後ろに変更する。

通常ならここで相手は自分の力が前に無駄に集中してしまい隙ができるのでそこを狙えばいいのだが……やはりそこは副団長。力を引こうともせず足を一步踏み出し、勢いのまま剣を横風ぎに振るってくる。

それを突きの準備をしつつしゃがんで避け、立ち上がる瞬間に足や肩から発せられる力ん腕に集約。斬り返しをさせる暇もない瞬間的な突きを繰り出してやる。

が、剣での反撃は間に合わないというのは相手も感じていたようで、瞬時に手元に戻された剣の腹で防がれる。

奇襲は失敗。普通にやれば俺的に不利なのでバックステップで後退する。長期戦は苦手なんだ。勇者時代では相手一発で殺せたいし。

「なるほど、強いな」

素直に賞賛する。

すぐに攻守の切り替えができる瞬時の判断力……かなり上達しているのだろう。今の変則的な戦い方も楽々と攻略されてしまった。

「君もあれだけの大口を叩けるだけの實力はあるようだ。認識を改めねばなるまい」

「へえ、今のが本気じゃないとでも言いたいのかい？」
「そうだ」

——瞬間。

気づけば既にフェイは遠くには居ず、すぐ目の前まで走り込んで来ていた。

……速い。

勇者時代ならば簡単に避けるなりカウンターを決められるなりで、きるその右斜め下からの逆袈裟斬りに、俺は反応ができない。

……そう。直前でやられていれば反応できなかっただろう。

が、俺はまるでそれがわかっていたかのように紙一重で後ろに避けて見せ、多少切れた前髪が風に流されて飛んでいくのを確認していた。

さらなる鋭い斬り返し。これもわかっていたかのように剣で受け流し、俺はそのまま相手の左斜め側に飛び出す。

フェイの体を擦れ違い様に横風ぎ、後ろに回った後に突きを連続で繰り出してやるが、二つとも防がれた。

そうして再び俺はバックステップで距離を取り、前掲姿勢で力無く構える。

「……見事だ。よく今の剣戟を避けた」

「お褒めに預かり光栄です、ってか？」

……本当に避けられるとは思っていなかったのだろう。軽く目を見開いて驚いていた。

ちなみに今のは『先読み』という技術であり、同じような戦い方を
する相手と何度も戦った経験があるのなら誰にでもできる技だ。
要するに『慣れ』だ。

俺は周りにはない、九代に渡る勇者の経験がある。いろんな奴ら
と戦ってきたんだ。先読みなんて俺には造作もないことだ。
それに、解析の魔術もある。それを使えばさらに凄いことになる
だろう。奥の手は別にあるから、まだ底は付いていない。

あまり手札を見せびらかすのもマズいしな。

「……本当に剣を握るのは初めてなのか？ 戦うのも？」

「当たり前だろう。俺と孝太は争いのない平和な場所から来たんだ。
武術の経験すら一つもないね」

学校の授業で何度かやったが、あれは数に入れなくてもいいだろ
う。

「本当にか？」

「しつこいな。当たり前だ。なんなら孝太に聞いてみてもいいんだ
ぜ？」

「……だが、君のその戦い方は……」

「才能だけでは生み出せない、とでも？」

「……」

無言で頷いた。

「なら、俺に勝ってみろよ。そしたら教えてやるかもな……俺の、強さの秘密」

「上等だ！」

俺の賭けという名の挑発にフェイは即答で乗り、剣を上段に大きく構えた。……俺に届かない距離で。

（魔装技か……！？）

俺の予想はどうやら当たったようだった。赤色の魔力がフェイの持つ鉄製の直剣に渦巻き始め、周囲の魔力……赤色魔力の流れが目に見えて変わった（解析を使えばすぐわかる）。

「訓練程度で魔装技使うのかよ……」

「ほう、よく知っているな」

「そりゃな。魔法と並ぶ有名な技の一つだろ」

魔装技。それは魔法に近く魔法ではない一種の技術のことを指す。自分の魔力を武器や防具などに定着させ、周囲の魔力を用いて固定し、色々と強化したり特殊な効果を持たせたりする技術、だったかな。これは勇者でも使えるので俺はよく愛用していた。そのせいでもっとチートっぽくなったが。

確か、今の俺も一回使っている。ほら、あの屋上での戦いの時。俺は自分の魔力を纏い、痛覚を壊す力を自分に掛けていた。だから

動けたんだ。

赤色魔力は……どんな効果があったかな。確か火属性魔法が比較的強くなり（と言っても『豪炎の魔力』には遠く及ばない）、魔装技状態の時は……鋭利化？ いやこれ黄色魔力か。硬化は黄土色魔力だし、衝撃は青色魔力だったよな？

んじゃ赤色ってなんだ？ ……そうだ！ 魔力自体を物質に変換する力、だ！

半分はただの魔力。半分だけ個体。そんな感じのよくわからないものだった記憶がある。

（どうするか……『幻惑の魔力』を魔装させるか？ ……だが武器に纏わせると俺の『幻惑の魔力』が相手にバレル確率が高い………：どうする？）

「行くぞッ！」

「っち！ やるしかねえか！」

赤色魔力がフェイの持つ鉄の直剣を余裕で包み込み、その大きさは2mは越えていると嫌でも理解できた。

——それが、放たれる。

上段に構えられた直剣が大きく振り下ろされ、かなりの勢いで飛んで迫ってくる大量の赤色魔力が視界を覆う。

「これも特訓だ……『烏の眼』^{カラス}発動ッ！！」

ズキッ！ という効果音が付きそうなほどの頭の激痛に顔を歪め

る。

それでも目を開いたまま、俺は視界全てを覆い尽くす赤色魔力に視線を向けた。

——瞬間。

「ぐ……」

あらゆる情報が頭の中に直接入り込んできて、『把握』『分析』『解析』『解明』……そして全てを『理解』した。

【赤色魔力。

○純度

赤色	31.47%
緑色	17.02%
青色	8.7%
黄土色	8.04%
水色	8.23%
黄色	14.21%
黒色	0%
白色	0%
紫色	0%
茶色	0%
透明	0%
混沌	0%
虹色	0%
その他	10.33%

【魔装技変換確率精度。

46% / 100%

【合計魔力量計測。MP59・8374・・・】

(中略)

【合計レベル計測。Lv3】

く……やっぱかなり頭痛い。

けど……これなら行ける！

(変動率……よし、解析完了。この魔装技の変動率式も解明完了)

ちなみに『烏の眼』使用からここまでの時間、僅か1秒。九代も勇者をやっていたんだ、並列思考も高速思考もなんでもできる。

……さあ、奥の手を見せてやろうじゃないか。

そう思い、俺は指先にも『幻惑の魔力』を纏わせる。

「式の変質は無いな。なら——」

俺は周囲の魔力——赤色魔力以外——を指に集めた『幻惑の魔力』で狂わせていく。赤色魔力だけが『異常』として捉えられるように。赤色魔力を純粹に魅せるために。

まあ……奥の手というのは、『幻惑の魔力』を使った魔装技のことだ。今回は指先に魔力を集め、効果を『魔力干涉』に指定した。

——そうして目立った赤色魔力だけが『烏の眼』の前に覆い広がり、さらなる解析……いや、『分解』を開始する。

（余分な情報はカット。純粹に赤色魔力のみを『烏の眼』で捉えることでさらなる最奥へと解析を進める……成功したな）

「ここまでくれば……」

ちなみにもう赤色魔力は前方1mくらいに迫っている。高速思考でもそろそろ追いつかなくなってきた。

が、もうなにも問題はない。

目の前の赤色魔力構造の根本を『烏の眼』で導きだし、それを『幻惑の魔力』の魔装技で狂わせる。

【魔装変動率急減少。……………0%を確認】

【魔装技解除。赤色魔力の空気還元の開始を確認】

と、無効化と同時に赤色魔力が俺へと衝突するが……無駄だ。もうただの魔力に戻っている。

それに、これは良い機会だ。相手は赤色魔力で俺が見えてないし（俺は見える。『烏の眼』使ってるから）、さすがに魔装技を放つてすぐに反撃されるとは思っていないだろう。

（一気に決める……！）

魔装技発動。部位は脳と両足。効果は『限界解除』。

「——うおおおおオオオオオオオオ！！！」

重心を全て前に移動。力の全てを足に集約させ、走る。

さらに魔装技『限界解除』により脳から発せられる命令の限界がリミッター外されているため、いつもの倍近い速度が計測される。

……足の筋肉繊維がヤバくなったが、『痛覚遮断』で気にしないようにする。

「ツ——！？」

「遅い！！！！！」

相手が反応するより遙かに速く横風ぎに斬り払い、鉄製の鎧を斬り付ける。

音もなく。ただ一線……。

「な……に……！！？」

振り向き確認すると——なんと鎧が綺麗に半円状に断ち切れていた。幸い生身の体に傷はないようだが……うん、これ、危なすぎじゃないか？

鎧がまったく意味を成していなかった。気を付けていなければ殺していたかもしれない。

それは困る。まだ、殺すわけにはいかない……。こんな大勢のところでそんなことしちゃ終わりだ。

「ッ!？」

何故か簡単に足がもつれ、俺は後ろに倒れ込んだ。

……まあ当然か。絶対に肉離れ……最悪粉碎骨折かな？

うわ……魔装技解きたく無^ね……。

「俺の勝ちだな、副団長さん？」

上半身だけ起きあがらせ、それだけ笑顔で言い切ってる。もうホント満面の笑みで。かなり嫌みになるように。

「……ああ、負けたよ」

………無視か。人が良いんだろうか？
まあいい。

「はあ……ん？」

周りを見れば、今回もみんな訓練を中断して観戦していたようだった。

うんお前ら、しっかりやれ。

「孝太、助けてくれー」

「……え、あ……お、おう！」

なんか惚けてたな。俺が勝つとは思ってなかったんだろう。
……しかし、力を見せすぎたかな？ 予想以上に副団長が強くて

困った……。団長の方は、現状じゃまだキツいかな。

「足がヤバイ。とりあえず担いで魔法の医療部隊かレンカのどこ連れてってくれ」

「わかった」

周りからの賞賛や嫉妬の視線を全て無視し、孝太の肩に担いで貰う。

「軽いな」

「勇者補正のせいだな」

人一人くらい楽に持ち上げられるだろうな、そりゃ。

……。ああ、やっぱり治療の時は魔装技解除しないといけないよな……。

……。っていうか、もう頭痛くないな。一回とか二回くらいなら平気ってことかね？

「そんじゃ……。今回は俺もう訓練やめるんで、後は頑張ってくださいーい」

最後に適当にそう言い放つと、孝太に連れられて俺はこの場を跡にした。

第十一話 副団長と魔装技の使用（後書き）

次か、次の次くらいに、ジン以外の残りの従者発表します。
ジンくんも従者に強い人が来るのは重々承知してます。いやー、復讐って大変ですねー。

第十一・五話 聖劍と勇者の呪い（前書き）

今回も八・五話と同じようにジン視点は一切ありません。

今回は主に孝太視点です。

第十一・五話 聖剣と勇者の呪い

） Side..久木 孝太 （

……本当に凄いな……ジンは。

勇者補正もなく、戦った経験すらなく……俺が聖剣に頼ってやっ
と届くような相手に、勝ってしまった。

それに、頭も切れる。

周りをしっかり見て、常に警戒していて隙がない。……ホント、
俺なんかよりもよっぽど凄いよ。

本当に俺が勇者でよかったのかな……？

……俺は……？

「おいどこ行ってる。そっち壁だぞ」

「あ……すまん」

「つたく……考え事か？」

やっぱりこいつには、なんでもおみ通しか……。

「ああ。本当に俺が勇者でよかったのかなって。お前の方が、向い
ていたんじゃないかって思ってたんだよ」

「……………」

……？ なんだ、無視か？

「……これで良かったんだよ。……これで………」
「そ、そうか……？」

そんな真剣に返さなくてもいいんだけど……。

「……絶対、助けてやるから………」

「ん、なにか言ったか？」

「気にすんな。いいから早くレンカんとこ連れてってくれ」

「あ、ああ……わかった」

気にするなってことは、どうせ俺には関係ないことなんだろう。
仁は頭が良いからな……無理に聞くこともない。仁にも仁なりの
考えがあるんだ。

……それはそれとして。

「なあ、仁」

「ん？」

「……レンカさんって、どこにいるんだ？」

「………お前もう死ねよ」

「ええ………!？」

それは酷いな……。

「わかんないなら医療部隊のところでいいから」

「いや、それもどこだかわからないんだが………」

「駄目だこいつ。早く何とかしないと………」

ぐ……しかたないだろ。まだこっちに来て三日しか経ってないん

だ！

お前が詳しくなりすぎなんだよ……。

「わーったよ。俺が案内するからその通りに動いてくれ」

「ああ……」

「とりあえずそこ左な」

……仁、もしかしてこんな広い城内の通路全部把握してるのか……？

……お前、俺が特訓してる間なにしてたんだ……。

仁を第二王女レンカ・アルスレイトの元へ送り届けた後、俺は訓練所に戻るために城内の廊下を歩く。

歩く。歩く……。歩く……。

……………。

「……迷った」

広い。広すぎる……。なんで仁は迷わないんだ……。

くそ、しかたない。戻って仁に道案内を……。

「いや……仁を送った場所、忘れた、俺……」

……拠点の城で迷う勇者。

……そんな肩書きいらねー……。

『なにしてるんですか、コウタ』

「エ、エクス？」

何処からともなく声が聞こえてきて、反射的にそう言い返した。

……そう。この声は、俺が持つ聖剣に宿る人格『エクスカリバー』

……長いから略してエクス。

エクスがしゃべることは、まだ誰にも言っていない。

仁にも、リスカルさんにも、フェイさんにも……。

ちなみに女性の声だ。

「いや、迷っちゃって……」

『……あなたは馬鹿なんですか？』

「ぐ……そう直球に言わなくても……」

いや、確かに仁には言われ慣れてるんだが……他の人に言われるのは辛い。

あ、剣か。

『歴代勇者の中でも、貴方は一番の馬鹿ですね』

「し、しかたないだろ……俺は仁とは違うんだ」

『他人を盾にするのは良くないですね』

「ぐ……すまない。悪かった」

確かに、俺は自分を仁と比べすぎているのかもしれない。

自重しないと……な。

フェイさんにも自信を持てって言われたし……。

『まったく……私には貴方が《レイ》や《カイト》のようになる姿が想像できません。まあ、ならない方がいいんですが』

「……レイとカイト、か。確か、歴代勇者九人の中で、国に反旗を起こした歴史を持つ二人だったか……？」

その話は、俺が初めてこの聖剣『エクスカリバー』を受け取った時にエクスから聞かされた話だ。

国を裏切った二人の勇者がいる。その名は、赤城零と篠崎海都。国の思想を裏切り、魔族と共に反逆をしたとかなんとか。

……それで沢山の人達が死んだって言うのに……どうして……。

『そうです。初代勇者レイ・アカギと七代目勇者カイト・シノザキ……。どちらも、世界の禁忌を生み出し、利用した二人ですよ……』
「世界の……禁忌？」

なんだ……それ。俺は聞いてないぞ。

「その二人は何をしたんだ？」

『片方の……初代勇者レイは、この国の全てを裏切り、この世に魔王という存在を植え付けました』

「な……！？」

な……どう、して……！？

なんで勇者が……魔王を……。

勇者は魔王を倒すために呼ばれるんじゃない……。

……あれ？　なら……初代勇者が魔王を生み出したって言うんなら……その初代勇者は……いったい何のためにこの世界に呼ばれたんだ……？

……そんな考えが一瞬頭に掛け巡るが……”すぐに気にならなくなった”。

”そうだ。今はエクス話を聞かないといけないよな。あんなこと、気にしてもまったく意味はない”。

……あれ？　今……俺はいったい何を……？

『そしてもう片方の、七代目勇者カイトは……禁術に手を染め、この国へと魔族と共に戦争を仕掛けました』

「戦……争……」

……どうして。なんで勇者がそんなことをするんだ。

”勇者はこの国のために、命の限りを尽くすために喚ばれたって言うのに”。

”その役目を忘れて反逆を起こすだなんて……許されることじゃない”。

『貴方は、そうはならないでいてくれますか？　貴方は、私たちの国を守っていただけますか？』

「……」　ああ。守る。全部守るよ……この国の勇者として、俺が」

” そうだよ。俺がやらなきゃいけないんだ”。

” 仁ではなく、この俺が……”。

『……ふふ、やはり《呪い》は無事健在してますね。……あのジンという人間は……どうも焦臭きなくさいですからね……用心するに越したことはないです』

エクスがなにやら色々と呟つぶやいているが、” まったく気にならない。耳に入らない”。

” 気にすることもない。気にする必要もない……”。

” 俺は俺がやるべきことをやるだけ。この国のために命を捨てることだけ”。

『……おや、どうやら誰かがこっちに向かって来ているようです。私は黙りますよ』

と、そう言ったきりエクスは本当に何も言わなくなる。

いつも、こうだ。俺の前でしかしゃべらないし、他人がいると口を開こうともしない。

まったく……何でだろうな。

……” まあ、俺が気にすることではないか”。

「おや、おぬしは……」

「え？」

と、なにやら古くさい口調が聞こえてきたので通路の左側に目を

向けてみると、なにやら派手な衣装を着込んだ金髪の少女が立ってこちらを伺っていた。

金髪は後ろで一つに纏めている、いわゆるポニーテールにされており、顔はまだ幼さが残る容姿だ。その瞳は翠色の光を放っており、今はその目が細められている。服は……説明しにくい、緑色と赤色と青色と黄土色の線がそれぞれ連なり、黒を主体として白を陰と置いた感じの派手な服……とでも言おう。左肩には、どこぞの生徒会の腕章宜しく、宮廷魔導師とそこには書かれていた。

「確か……勇者コ……ーラだったかの？」

「なんで飲み物!？」

「飲み物なのかコーラというものは……美味しいのか？」

「あ、それは個人によって違う。俺は飲めないけど仁は好きだって」

「ジン………ああ、勇者の従者だったかの。して、おぬしの名は

………なんだったかの？」

「俺は久木孝太……いや、コウタ・ヒサギだよ。君は？」

「妾はサラ・メルトフィリア。一応宮廷魔導師をやっておる」

ああ……一応なんだ……。

「しかし……確か勇者は今の時間、騎士の訓練を受けている時間ではなかったか？」

「それは……」

「それは？」

「……実は迷いました」

聞かれたのでしかたなくそう答えると、きよんとした表情になった後、腹を抱えて笑い出しやがった。

……く、なにか言い返したいのに、言い返せない……。

「くくく……勇者が城で迷うか……おぬし、面白いの……くく」
「放つといってくれよ……もういいから放つといってくれよ……」

「くくく、はははははは！ 面白い、面白いぞ！ コウタよ！」

ぐう……なぜもつと笑い出すんだ……。

「くく……良かろう。案内とまではいかぬが、少し手伝ってやろう」

と、そう言う少女……確か、サラだったっけ。うん。サラが俺のすぐ傍に近付いてきて、手を上げ……。

「……む、背が高いの……ほれ、少ししゃがめ」

「あ、うん……」

とりあえず言われた通りに片膝だけを付き、頭をサラの少し下になるくらいまで下げる。

するとサラは手を俺の額に当て……ようとして俺の顔を覗いてきた。

「……ふむ、おぬし……もつと慌てないのか？」

「え、なにが？」

「む……少し傷つくぞ。妾のような美少女がこんなに目の前におるのだ。少しくらい赤面してもよいだろうに」

……ちなみに今のサラとの顔の距離は20cm程だ。

「とは言われてもな……なんというか、慣れているというか……」

元の世界じゃ、周りと違って何故か女の子の友達が多かったしな

……仁がその理由を知ってるらしかったから聞いたら、何故か呆れられたけど……。しかも教えてくれなかった。

「ほう、それは嫌みか？」

「え、いや、ナニガ？」

「そこの女とよくこのような距離で話しているのだろう？ 慣れているということは、その内の誰かとキスもそれなりにしている、と」

「なんでそうなる！？ し、してないよ！ そんなの……」

「くく、冗談じゃよ」

……ヒドイ冗談だ。この人、仁より性格悪くないか？ あ、いや、別に仁が性格悪いってわけじゃないぞ？（毎度さりげなく馬鹿にしてくるけど）

「では、始めようかの」

と、そう言うサラは再び俺の額に手を置いて、目を閉じた。

「なにをするんだ？」

「なに、刻印魔法の一種じゃよ。情報を頭に記憶として書き込むだけじゃ」

結構凄い気がするんだが……。

『っ……！？』

……？ どうしたんだ？

エクス、今なんか慌ててたけど……。

と、サラの翳した手が光り始めた時……。

「っ！？　こ、これは……！？」

「ん……？　どうしたんだ？」

「い、いや……なんでもない。なんでもないのじゃ……」

なんだ……？　どう見ても何かありそうなんだが。

『ああ……しまった。私がコウタさんを訓練所に送り届けるべきでした……』

エクスもいったいなんなんだ？　よく聞き取れないけど……。

「つ……続きをいくぞ？」

「あ、ああ……」

サラがそう言って、さらに光が強くなったので俺は思わず目を瞑った。

同時に、城全体の構図……地図のようなものが、直接頭の中に入ってくる。

情報として。記憶として。俺は『理解』した。

「凄いな……仁も魔法使えるって言ってたけど、今度見せて貰おうかな」

「……………」

「……？　さっきからどうしたんだ？　なんか変だぞ」

「なんでもない……なんでもないのじゃ！」

「うおっ！？」

何故か頭を叩かれて、何故かサラが走って逃げていってしまふ。

……俺、なんか悪いことしたっけ……。

「んー……まあ今度謝ればいいか。そろそろ訓練に戻らないと怒られるしな」

……そうだ。

”俺が気にすることじゃない”。

”勇者が気にすることじゃないんだ”。

”勇者はただ、与えられた役目をこなすだけでいい”。

だから……”俺は何も知らなくていいんだ”。

〈 Side out 〉

〈 Side..サラ・メルトフィリア 〉

なんじゃ……なんなのじゃ、あれは……。

あの強力な『洗脳』の呪いは……！

見たこともない、聞いたこともない、強力な呪い……。

『自覚が出来ない』、非道で残酷な……しかも、きっと魔王ですら解けない、複雑怪奇な『呪い』……洗脳の魔法。

あれが……あれが勇者に課した、この国の本質……？

ただ利用するただけに呼び出され、捨てられるだけの『駒』……？

「……王族や貴族の奴ら……なにやら焦臭いと思っておったら、そういうわけじゃったのか……」

……ならば、初代勇者は？ 七代目勇者は？

……本当の歴史は……真実とは、いったいなんなのじゃ……。

「妾には……妾には何もわからぬ。……じゃが」

……じゃけど、妾にも……妾にも、勇者という存在を生み出した責任はある。

この国にいる限り。

勇者召還を詳しく調べもせずに、ただ歴史を繰り返してきた、先代の罪……。

この程度で償いきれるとは思っておらぬ。……それでも。

「妾が……コウタの呪いを解いてやらぬとな……」

それがどんな結果に繋がってしまったとしても……それがこの国の、せめてもの償いとなろう……。

「……知らぬといかぬな……過去の、初代と七代目の真実を……」

……そうしてこの国が、また、呪われた勇者の歴史を繰り返すことのないようにせぬとな……。

第十二話 政略結婚と従者発表（前書き）

4721文字です。

初期の頃に比べると長いですけど、やっぱりもっと一話一話を長くしたいですね。

第十二話 政略結婚と従者発表

彼は青年に手を差し伸べて、

『君を手伝おう』

そう言った。



孝太に、レンカのいる豪華な部屋……まあつまり、第二王女の個室まで連れていって貰い、何やら中が騒がしくややこしいことになっていったようなので、孝太を早めにどこかへ追いやる。

……あ、そっち来た方とは反対方向なんだが……まあいいか。とりあえず迷わないように頑張れ。

さて、と。とりあえず『痛覚遮断』を実行しながら立ち上がり、扉のすぐ横の壁に寄り掛かる。

そしてそのまま気配を消して、耳を澄ます。

……あ、俺の監視ならもういないぞ？　なんかリスカルの奴にも俺にバレてることを話した後、しばらくしていなくなった。

ラッキーだ。監視が居ちゃ自由に動けないし、レンカと話するとき

も周りを注意しておかないといけないし。

……で、この部屋ん中では誰と誰がなんの話をしてんのかね。

『嫌です！ そんな話は受け入れられません！』

この声はレンカだな。まあ当たり前か。本人いなきゃ不法侵入になるしな。

ちなみにこの世界でも不法侵入は罪に問われるぞ。

『何故？ 良い話じゃない。この話を受ければ仲の悪い私達の国と帝国の奴等との橋渡しにもなって、何か小さなことで戦争になることもなく、協定だって結べることになるかもしれないじゃない。まさか、今更……今更、ずつと言われたことをこなすだけだった《道具》をやめて、政略結婚は嫌だとしても言い張るつもり？』

あー……なるほどねえ……政略結婚の申し込みか。

しかも帝国つつーと……ラミィセルフ帝国か？ 確か南の大陸のほぼ全てを牛耳ってるとこだったか？

……うーむ。勇者召還の時期は魔王討伐のためにほぼ全ての国が協定を結ぶんだけど……確か帝国って唯一協定結ばなかったとこだよな。

魔王に意識がいつてる時に戦争仕掛けられるのはさすがに不味いからな……で、帝国の王族の誰かがレンカに政略結婚を申し込んできた、と。

王の野郎は間違いなく承諾済みだな。王妃は知らんが……王に最終決定券はあるし、他はあんま関係ないな。

……と、なると……この部屋にいるのは必然的にレンカと王族の内の誰かとなるわけだが……とりあえず女性の声だったな。

『でも……私……私は……！』

『はあ……でも、何を言おうともう駄目よ。決まってしまったんだもの。甘んじて受け入れなさい』

『そんな……！ お姉様！』

っ……！ なるほど、第一王女か……！！

大物だな、こりゃ……。

『黙りなさい』

……さてさて。そんな状況分析も一通り終わったところだし、レンカを助けてあげようかね。

どーせ、俺が居るから断ってるんだ。一途なレンカが頑張ってくれてんの俺が何もしないでどうするよ。

「はあ……リンに浮気とか言われて怒られたりしないかな……」

鬱だな……でも助けないと。

今の俺は『篠崎海都』じゃなく『赤崎 仁』なんだから。

リンもきつと許してくれるさ。……たぶん。

「そんじゃ、行きますか」

とりあえず派手な登場で注目を集めようと、扉の前に立つ。

あんまり長くは立ってられないけど……まあ骨さえあれば大丈夫。きつとレンカが治してくれる！

というわけで、俺は目の前に立ちはだかるの豪華な扉を全力で蹴り、抜く！

【ズガンッ！！】

「あ……外れた」

脆い……脆すぎるぞ。

いや、まあ、うん。いくら怪我してるとはいえ、全身の力を一カ所（右足）に集めた蹴りをお見舞いしたんだ。こうなったのは当然の結果だろう……うん。

もう中に居た二人なんて呆然と俺のこと見て来てるもん。あ、レンカは微笑んでくれたけど。

……駄目だ、文句無しに可愛い。リンに匹敵する萌えだ。

「なんですかあな「ジン！！」」

……姉の言葉を遮るか、レンカ……。

しかも少しは考えて動いてくれ。王族の輩が居んのに抱き付かれると色々和不味いんだが……。

「……なるほど。そういうことでしたか」

あ、こりゃヤバい。なんとかしないと……あー、どうしょ。

良い言い訳が思いつかない……うーん。

「なにがそういうこととか、あーいうこととか知りませんが、とりあえず俺はレンカに両足回復してもらいにここに来ただけなんで気にしないでくださいーい、と」

まあ、暗殺でもなんでもやってこいよ。俺が全部『喰って』やるから。

強くなれるのなら、暗殺も悪くない。

……早く『食料』の基を手に入れないと、復讐が間に合わなくなるからな。

「ま「凄い怪我じゃないですかジン！　いったいなにしてたんですか！？」」

……うん、レンカ、姉のことは二の次なんだね。まさか二度も無視するとは。

……まあいいや。レンカだしな。ヤンデレ属性が少し入ってるしな。

「全力で走ったらこうなった」

嘘ではない。一応。

「そうですか……もうなるべく本気で走らないようにしてくださいね。今、治してあげますから」

く……純粹過ぎて眩しい……まさかこんな簡単に信じてくれるなんて。

嘘じゃないのに、なんか罪悪感が……。

……あ、魔装技、解かないと……。

あー、凄く痛いだろうーなあ……解きたくないな……でも解かないといけないしな……。

「いきますよ？」

……しかたない。解くか……。

「……ぐう……！？」

痛……い。めっちゃ痛い。なんかマラソンを、筋肉繊維無くなるまで走った感じに痛い。

……が、我慢できないほどではない。

「《治療せよ。彼の者に精霊の癒しを与えたまえ。医療^{ヒール}術》」

レンカが詠唱を言い切り、俺の足に両手を翳すと、何やら痛みが引き始めてくる。

急激に傷が塞がる感覚……何もかもが全て元に戻っていく感覚。

……回復魔法は、やっぱりいいな。いや、まあ、そのために怪我を負うのは割に合わんけど。

「……はう。終わりましたよ、ジン……」

「ん、ありがとう」

お礼として頭を撫でてあげると、多少顔を赤くして恥ずかしがりながらも微笑んで笑顔を見せてくれる。

うん。かなり目の保養にいいね。

「……私はもう戻りましょう」

あ、そういや第一王女いたっけな。

「まー待ちなさいって第一王女様」

「なんでしよう。ずっとあなたたちは二人でピンク色のオーラ出してればいいじゃない。そうよ、そうしていなさいよ」

うわ、拗ねてるよ……なんだかキャラが台無しだよ。

「俺への処分はどうするんだ？ 帝国の奴等の王族共の政略結婚を断らせ、単なる従者でしかないのにレンカに取り入った俺の罪は？」

とりあえず真面目な疑問をぶつけ、答えを第一王女へと煽る。

「処分は無しでいいですよ。妹の第三王女ミースにでも話を贈らせますから。レンカはこれまで沢山の頼みを聞いてくれましたからね。今回だけは特別ですよ」

……なんだ。案外話がわかるやつじゃないか。

……まあどちらにせよ、最後にはこの人も殺すんだけどな。変更なんてあるわけがない。

俺が殺さないのは、今のところレンカと孝太だけだ。他は平民も含めて全てを殺す。

「そりゃよかった。安心して俺は過ごしてもいいのかな？」

「帝国の暗殺には気をつけてくださいね。第三王女ミースより第二王女レンカの方が、政治的には価値がありますから」

「りょーかい。ご忠告どうも」

どちらにせよ命は狙われる、か。

……まあいいか。

「ん、帰るのか？」

「ええ。私がここに居ては、どうやら邪魔のようですからね」

……あれ？ こいつさっきまで悪役じゃなかった？ ……ふむ。

「なら、最後に一ついいか？」

部屋を去ろうとする第一王女へと真剣な顔を向け、そう言い放つ。

……無関係か悪役か。第一王女なんてデカイ肩書き持ってんだから、見極めておく必要がある。

有害な敵か、無害な敵か……というわけだ。

「なんです？」

「あんたは、初代と七代目勇者についてどう思う？」

「……………貴方は、なにを何処まで知ってるの？」

……なるほど。“全てを知っている” 奴か……………有害な敵だな。

「いや、意味がわからないんだが。孝太は裏切らなそうな奴だから、裏切るような勇者が居た場合ってどんな感じなのかなって……そう思ったただだよ」

「そう……ならいいわ」

……そう。こんな奴でも、全てを知っていながら何をする気もないってことなんだ。

……やっぱり許せない。

俺は勇者だったから……九つも、人生を犠牲にしてきたから……。

……妹を人質に取られ、ただ戦争の道具となった初代の頃……。

……ブエルやリンと仲良くなって……親友と恋人の関係になって……それでも『呪い』のせいで、みんなを……魔族の全てを、滅ぼして……俺は、ブエルとリンに、剣を向けて……。

……だから。

だから、俺はこの国の奴らを……いや、この国の全てを許すわけにはいかない。

全てを殺す。全てを壊す。全てを潰す。

それが俺の決意。俺の決断。

……絶対に、滅ぼす。俺が、必ず復讐を……。

「それでは、また会いましょうお二方」

「ああ」

「はい、お姉様」

……さて、俺もレンカの邪魔にならないように退散……いや。

その前に、幾つか聞くこととやることがあるな……。



同日。午後。13…00。謁見の間。

当初の予定通り俺と孝太は謁見の間へとやってきて、ただいまあのクズ王に片膝を付いて話を聞いている最中だ。

……呼ばれた理由は、メイドさんの言っていた残りの従者発表。つまり、孝太の……今代の勇者の“仲間”^{てき}の発表。

きっと、強い奴等が選ばれるんだろう。

今の俺では、太刀打ちできないような奴も居るんだろうな……。

……早く。もっと、早く強くななくちゃいけない。

もっと『食料』を確保しないと……。

もっと喰らって【力】を手に入れないと……。

……勇者の力試しの討伐相手……かなり強いだろうから、そいつは絶対に喰わないとな。

後は、近いうちに城下町に降りて適当な冒険者や悪人共でも喰らうとしよう。

「ではまず、一人目の従者を発表します」

と、思考に集中しているうちに、もう発表の方まで移っていたようだ。

……さて、どんな奴が来るのやら。

「二人目。アルスレイト王国、騎士団副団長。フェイ・セラフル」
「ハッ!!」

……なんだアイツか。

団長はこの国に置いておきたいだろうから……無難な判断だが、あの女じゃ力不足感が諫めないんだが……今の俺でも太刀打ちできるような……いや、もしくは力を隠している可能性があるか……どちらにせよ、油断はできない。

そして、彼女が“知っている”か“知っていないか”……それもある必要がある。

「二人目。アルスレイト王国、宮廷魔導師。サラ・メルトフィリア」

……解析の魔術、発動。

……へえ。これは……『疾風の魔力』かな？ ……いや、そ

れに近い、ただの緑色魔力か？ どちらにせよ、詳しいところは【解析阻害】の魔法が掛かってわからないな。『烏の眼』を使えばすぐわかるだろうけど、さすがにあの強さの魔導師には感づかれるだろうな……やめた方がいい。

あいつは、強い。

「三人目。アルスレイト王国、第二王女。レンカ・アルスレイト」
「はいっ！」

……うん。まあ、レンカは観察する必要無いよね。

「四人目。ナバルス王国、使者。シエルノ・ルーフライル」
「は、はひっ！」

……ドジッ娘か。

ってそうじゃなくて。

……ナバルス王国というと、確か隣の人間の国だったっけ。二代目勇者の頃にアルスレイト王国と友好を結んで以来の関係だよな。

……でもこいつ強いのか？ まあ、とりあえず解析を……っ！？

「んなっ……」

「？ どうした仁」

「い、いや……なんでもない」

……まったく、質が悪いな……まさか、黒色魔力の持ち主とは……魔族とのハーフ？ いや、でもそれにしてはそんな気配は全然……

……何者だ、こいつは。

どちらにしろ、用心するに越したことはない。

「最後。勇者の友、ジン・アカサキ」

「ああ」

「……以上にて、従者の発表を終える。これより六人はそれぞれ交流をし、互いの仲を深めよ。以上だ」

……まったく、めんどくさい奴等ばかり集まったもんだな。

はあ……これからが、大変だ……。

第十三話 一人の勇者と五人の従者（1）（前書き）

4041文字です。

第十三話 一人の勇者と五人の従者（1）

青年は仮染めの仲間達へと向き直り

『前に立つのなら、殺す』

そう、王国への反逆の決意を口にした。



俺達（俺、孝太、レンカ、残りの従者全員）は謁見の間から退室した後、とりあえず裏庭（俺がレンカを口説き落と……いや、励ましたり解析の魔法を覚えた場所）に移動し、それぞれの楽な姿勢で全員が集まった。

俺は城の壁の方へと背中を預けて腕を組み、孝太は適当な場所です普通に立っている。レンカは……まあ、俺の隣で壁に寄り掛かりながら擦り寄ってきていて、あの騎士団副団長のフェイは直立不動で適当な場所で佇んでいる。最後の二人は実に個性的だが……宮廷魔導師のサラなんとかは基礎魔法の『浮遊』で浮きながら胡座で座っており（浮くだけで、飛べない）、あのドジッ娘の使者……黒色魔力保持者であるシェルノなんとかは落ち着かずに辺りを見渡してい

た。

最後の一人は全然落ち着いてはいないが……これがデフォなんだろう。気にするだけ無駄だと割り切る。

さて、この沈黙の中、誰が一番始めに語り始めるべきか……まあ決まってるけど。

俺は未だにブーツと立っているだけの孝太をとりあえず睨み、話を始めろと促す。

するとあいつは『俺かよ』と言わんばかりに困惑した視線を送ってきたが、当然とばかりに睨み返す。

そしてしばらく経ち、孝太が話を切り出した。

「えっと、俺が今代の勇者コウタ・ヒサギです。これからよろしくお願いします?」

「なんで疑問系だよ」

とりあえず、つつこむ。

「い、いや、だってみんな何も言わないからさ……」

「……」

まあ……このメンバーじゃそうなるわな。

俺は率先して話すような奴じゃない。レンカは俺に擦り寄って話を話さえて起きていないように見える。副団長フェイも、きっと進んで話すようなタイプではなく、孝太の言葉を待つような感じだった。宮廷魔導師サラもめんどくさげにしているだけだったし（なんか孝太の方をよくチラ見していたが、まあ、たぶんまたフラグでも立てたんだろう。視線に隠ってる感情が違った気がしたけど、気のせいだろう）、ドジッ娘も自分から話すことはないだろう、空気

やキャラ的に。

……孝太は、まあ、俺によく頼る節があるからな。俺が切り出すのでも期待していたんだろう。

そんな沈黙の中、一人勝手に話し始めたんだ。重圧は思いの外強ほかかったんだろう。

「……ったく、しかたないな」

つまり、現在の状況では初めに話し始めた奴が全員に重圧されるということになる。実際、このせいで孝太はもう黙ってしまっている。

……非常にめんどくさいが、話が進まないんで俺が切り出すしかない。めんどくさいけど。

そう思い、口を開こうとした時、

「とりあえず、自己紹介でもしようかの。コウタもそのようなことを言いたかったようじゃし」

と、いままで黙っていた宮廷魔導師が言い放った。

……いや、孝太これはたぶん適当なことを言っただけだぜ？ 考え無しだしな。

まあ、いいか。名前だけならもうみんなわかっているわけだが、それ以上のことは何も知らんしな。

そんじゃご希望通り始めるとしますか、自己紹介。

「んじゃ、誰からやるんだ？ 誰でもいいけど」

「妾からいこう。妾の名はサラ・メルトフィリア。一応宮廷魔導師をやっており、得意属性は風じゃ」

「……そういやリヘナ（屋上で戦った奴）も宮廷魔導師だったが、宮廷魔導師は勇者の真実をみんな知っているのか？ ……どこまでが、知ってる奴らだと判断すればいいんだ？」

「……まあ、これは今考えても無駄なことか。」

「次は私が言おう」

次は副団長か……。

「私の名はフェイ・セラフル。王国騎士団の副団長を務めているが……まあ、気楽にフェイとでも呼んでくれ」

「了解、副団長」

とりあえずからかってみる。

「……話を聞いていなかったのか？」

「聞いてたよ。副団長さん？」

「……まあいい」

からかい甲斐の無い奴だな……。

「次は、俺かな？」

「……『幻惑の魔力』は隠したいからな。どうするか……。」

……よし。

「俺はジン・アカサキ。孝太と一緒に召還された、多少剣術と魔法が上手い一般人だ」

これでいこう。

なにやら「あのレベルで多少はないだろう」とか「ジンはもっと凄いですよ」とか色々聞こえるが、無視だ。

「次は、そうじゃな。ほれ、そのナバルスの使者」
「はひっ!？」

黒色魔力のことは言うてくるのかな？ 隠してるようなら、警戒心は上げざる負えないけど。

「わ、私は、シェルノ・ルーフライル、です。闇魔法が、とく、得意なので、よ、よろしくです」

……なんか、警戒してた俺がバカみたいなんだが。

……まあ、いいや。

「俺は「孝太はいいよ。どうせみんな知ってる」えー……」
「ん、レンカ。ほら、自己紹介」

なにやらさっきからまったく動かない第二王女様の背中を叩き、注意を引く。

……さつきからずっと目立ってたんだよね。

レンカは不満そうに頬を膨らませるが、それは指で撃退。ぷしゅー、と音を立てて空気が漏れる。

それから、しかたないとも言うように周りへと向き直った。

「私は、この国の第二王女、レンカ・アルスレイトです。大体の基礎魔法、回復魔法が得意です」

因みに説明を忘れていたが……基礎魔法というのは、どんな魔力を持つ者でも共通して同じように扱える魔法のことだ。

たとえば、俺が使う解析の魔法。それに刻印魔術に、今サラという宮廷魔導師の使っている浮遊魔法。これら全ては、基礎魔法へと分類される。

基礎魔法には多くの種類があり、属性魔法に比べて比較的扱いやすい。ほら、俺が使う解析の魔法って詠唱を唱えてないだろ？ 基礎にはそういうものが多いんだ。

……と、脱線したな。

今は自己紹介が終わったところだったか。

「さて、それじゃまずは……一つ、俺はお前らに対して聞きたいことがある」

全員の顔を見渡し、俺はそう切り出す。本当は何かがバレそうなので嫌なのだが、これが一番手っとり早いのでしかたがない。

全員の視線が集まったことを確認して、口を開く。

「お前らは、『勇者』という存在についてどう思う？」

「は……？ おいジン、なにを……」

「いいから、全員答えろ」

意味がわかってなさそうな孝太を睨んで黙殺し、全員に鋭い声で訪ねる。

……エクスカリバーの奴も確認してみたが、まだ動くような素振りにはなかった。

様子見ってどこか……。

「魔王を倒す英雄だと認識している。憧れの対象だ」

フエイが言った。

「そ、その……みんなを平和にしてくれる、きゅ、救世主と」

シエルノが言った。

「……」この国のために命の限りを尽くし、魔王を倒すための存在
”」

……孝太が言った。

……憧れ？ ふざけるな。突然異世界に拉致された俺達の気持ち
を何も考えず、ただ自分がそう感じているだけだろう。

全てを救う救世主？ どうしてこの世界の奴等を……この国を救
わなくちゃいけない？ お前等は、勝手に勇者を孤独にし、苦しみ、
操っているだけだと言うのに。

……この二人に弁解の余地はない。力試しの討伐でも終わった後に、喰うとしよう。

……孝太も、やっぱり『呪い』が発動している。

……悪い、孝太。今の俺じゃ、まだ……お前を助けられない。

もっと強くならないと。

もつと、力を手に入れないと。

勇者より強く。

魔王より強く。

なによりも……強くなれば。

そうすれば必ず……助けられるはずなんだ。

「……妾は……」

「……ん？」

「ただの人間……いや、奴隷のようなものだ……」

……そう言ったのは、サラ・メルトフィリアとか言った、宮廷魔導師だった。

後半は小さく言っていたので、俺以外には聞こえていないようだったが……。

「……」

こいつは……知っているのか？
知っていて、こんな反応を？

……もしそうなら、リヘナやリスカル、王族の奴らよりは救いようがあるかもな。

まあ……なにもしないと言うのなら、容赦無く殺すが。

「それで、これからどうするんだ、仁」

「いや……孝太、リーダーはお前だろ？ 俺に振るな」

「いや、でも……何すればいいのかわかんないし……」

……ダメだこいつ、早くなんとかしないと……。

……しかたないな。

チームでやることと言ったら、これくらいだろ。

「お互いの、実力を知ること。それから、連携の練習。後はチームでのコミュニケーションを取って、信頼を高める……ってところか、孝太」

「……具体的には？」

少しは自分で考えろよ……。

「得意な技や魔法を披露したりすればいいんだよ」

「……なるほど。それでいこう。いいかな？」

「……はあ。まったくこいつは……。まあいいや。んじゃ、ここは言いだしっぺの俺からやろうか」

出しても平気な手の内は……と。

……あー、よし。リヘナから取り込んだ緑色魔力でも使うか。
そう思い立ち、右腕を上げて10mほど遠くの地面へと向けて掌てのひら

を突き出す。

そして

「《舞えよ風。敵を切り裂く刃となれ。飛風刃》」
ウインドカッター

勇者の記憶と、屋上で使っていたリヘナの詠唱を思い出しながら、初めてながらも風の魔法を繰り出してみる。

きちんと発動するのか心配だったが……必要無かったみたいだ。突き出した掌に緑色魔力が循環し、詠唱により現象を引き起こす。風が渦巻き、素早く鋭いカマイタチが出現。高速で突っ込み地面を深く抉った。えぐ

（……思ったより強力だったな……『幻惑の魔力』を使えば、また色々と変わるんだろうが……）

「ほう……」

「す、凄いですね……」

「なかなかじゃな」

「俺にはよくわからないんだが……」

……そんなに強かったか？

（けど……これは解析の魔術のおかげかな）

解析の魔術のおかげで、魔力の循環を詳しく知ることができる。それにより、無駄なくしっかりと魔法を発動できるから……普通より強力になるんだろうな。

まだまだ無駄が多いが……こんな初級魔法でも、完璧に扱えれば

……下位の上级魔法くらいの威力はでるかもな。というか、上级魔法って派手すぎて魔力に無駄が多いんだよね……。

……まずは、下級をマスターすることから始めようかね。

「つ、次は私が……」

そう言ったのは、黒色魔力保持者のシェルノ・ルーフライルだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834w/>

知らない天井だ……。

2011年11月13日16時08分発行